

529

111

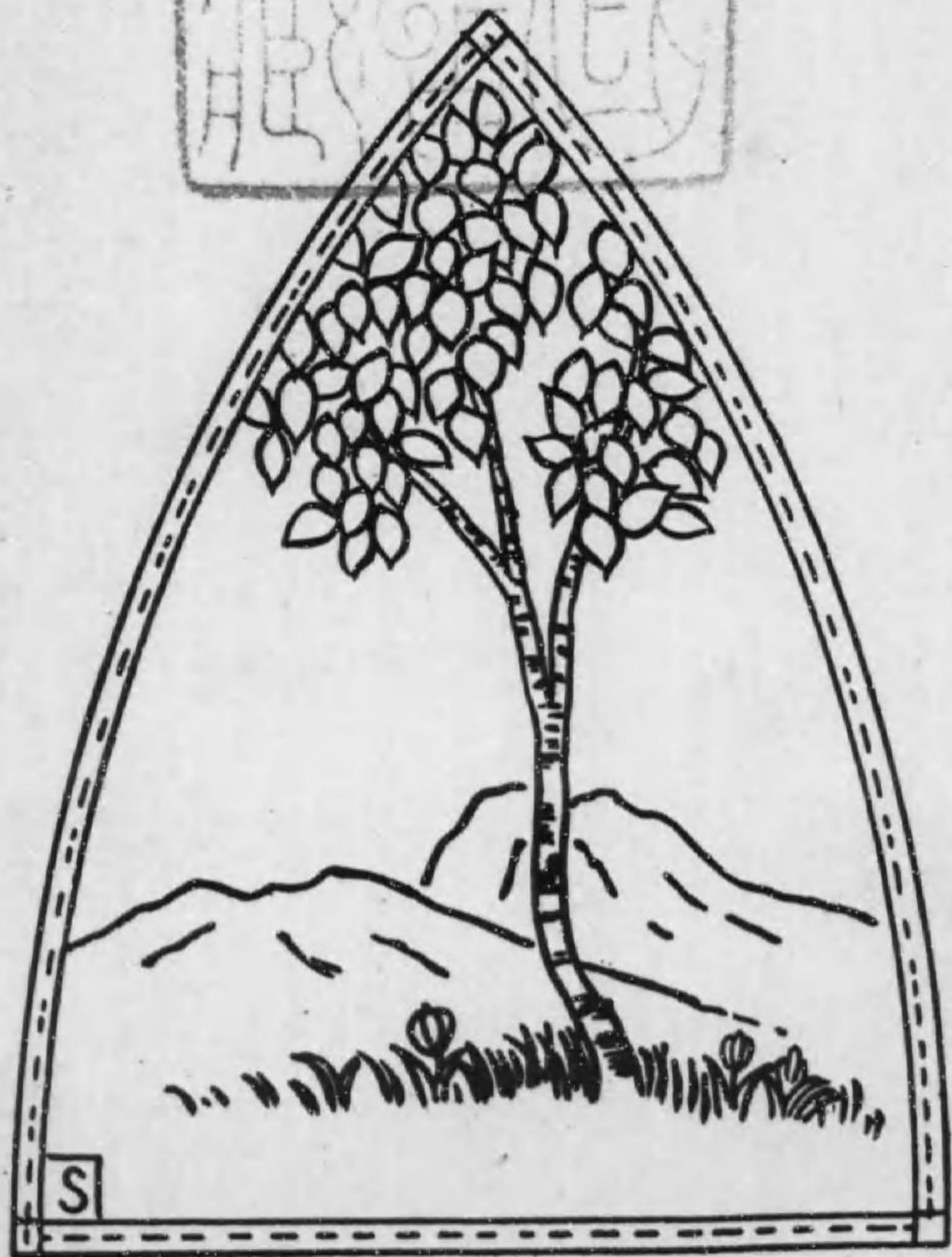


始



529
111

山乃素津之



别所梅之助著

13. 9. 25

内交



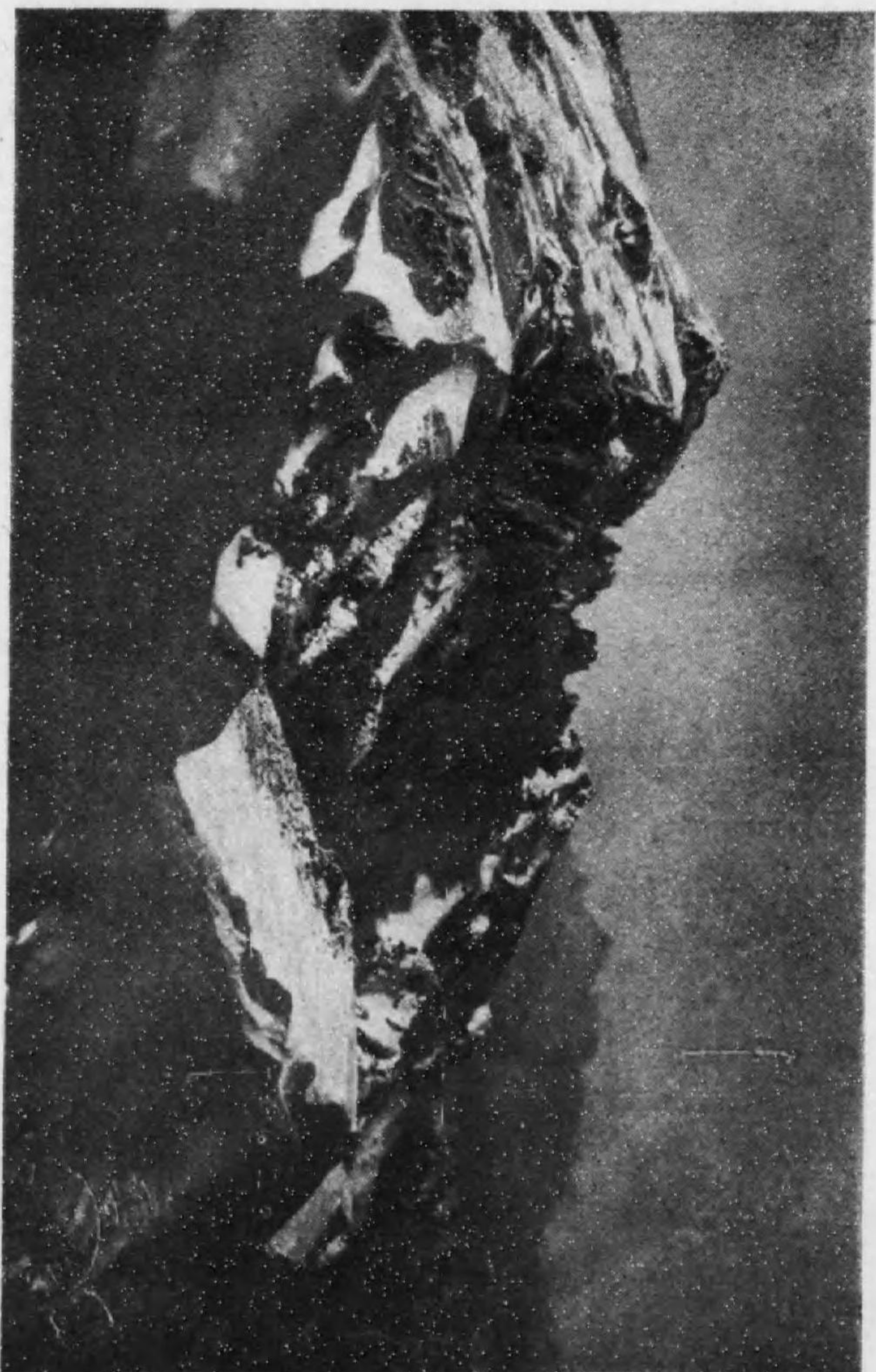
第一圖版

庭の狗天 山間淺



リサほの口火 山間淺

第二圖



岳 燕 の 冬 初

第三圖版

岳 燕 の 夏



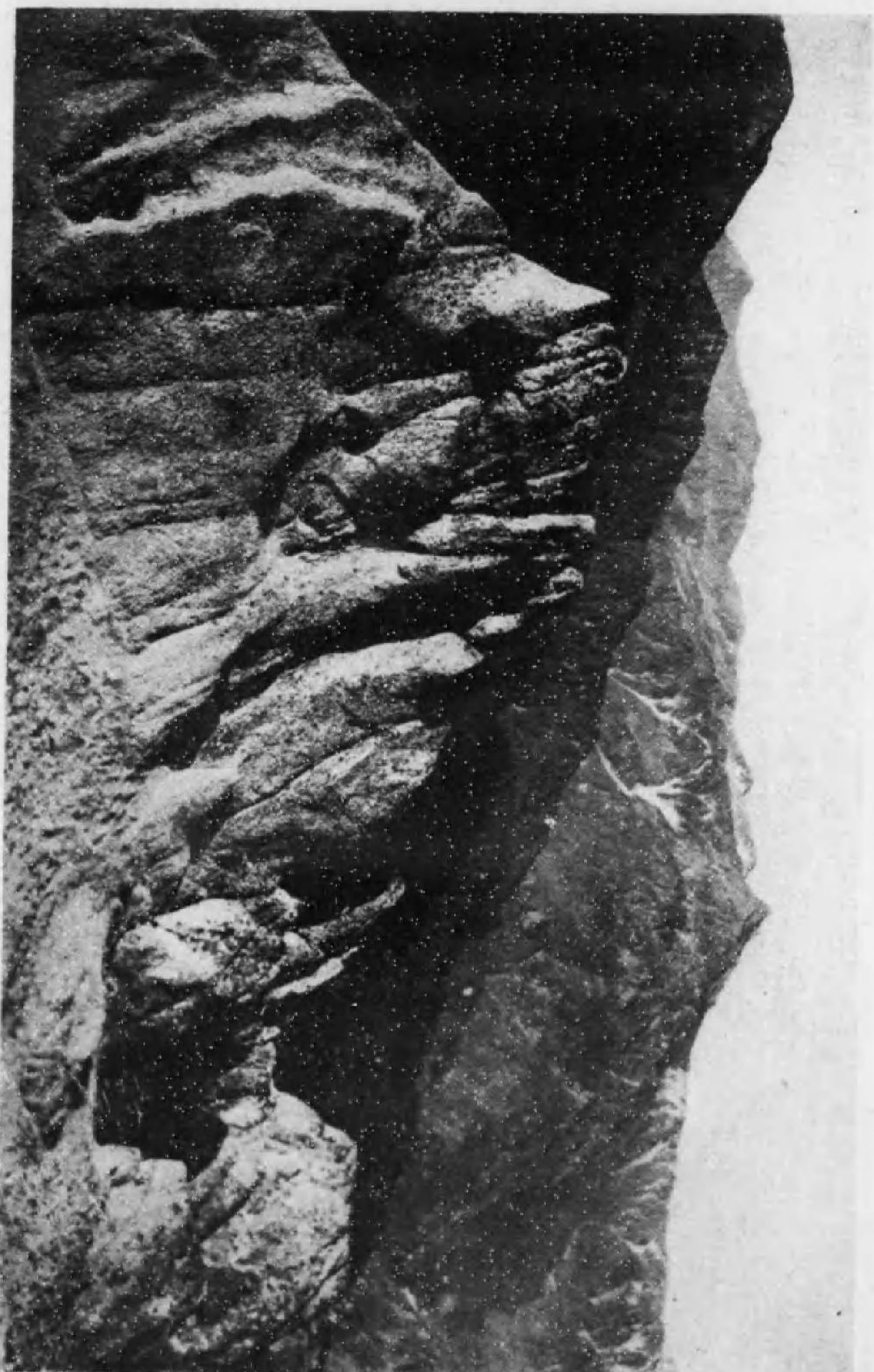
山 頂 雪 景





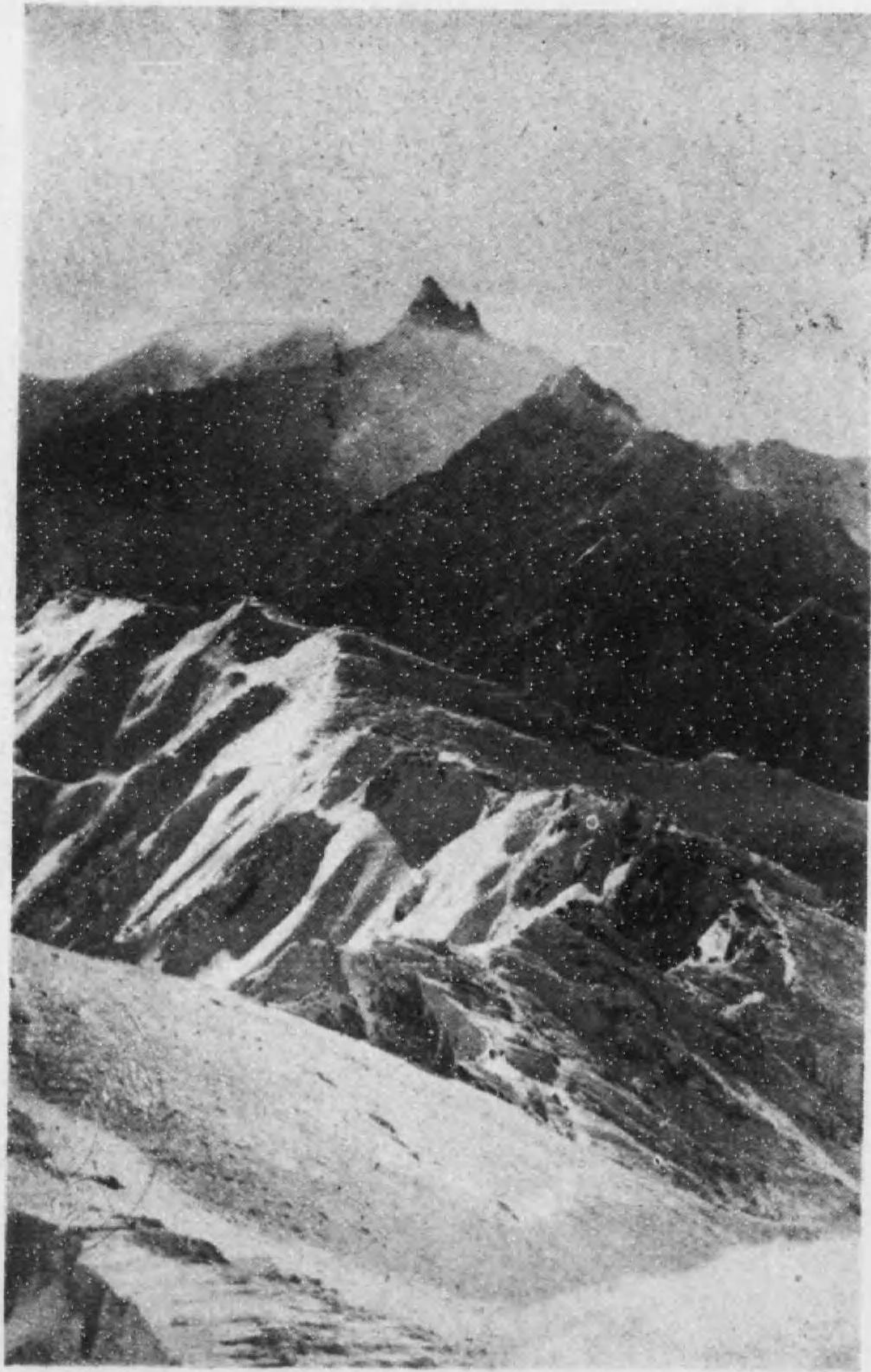
大天非岳

第五回表



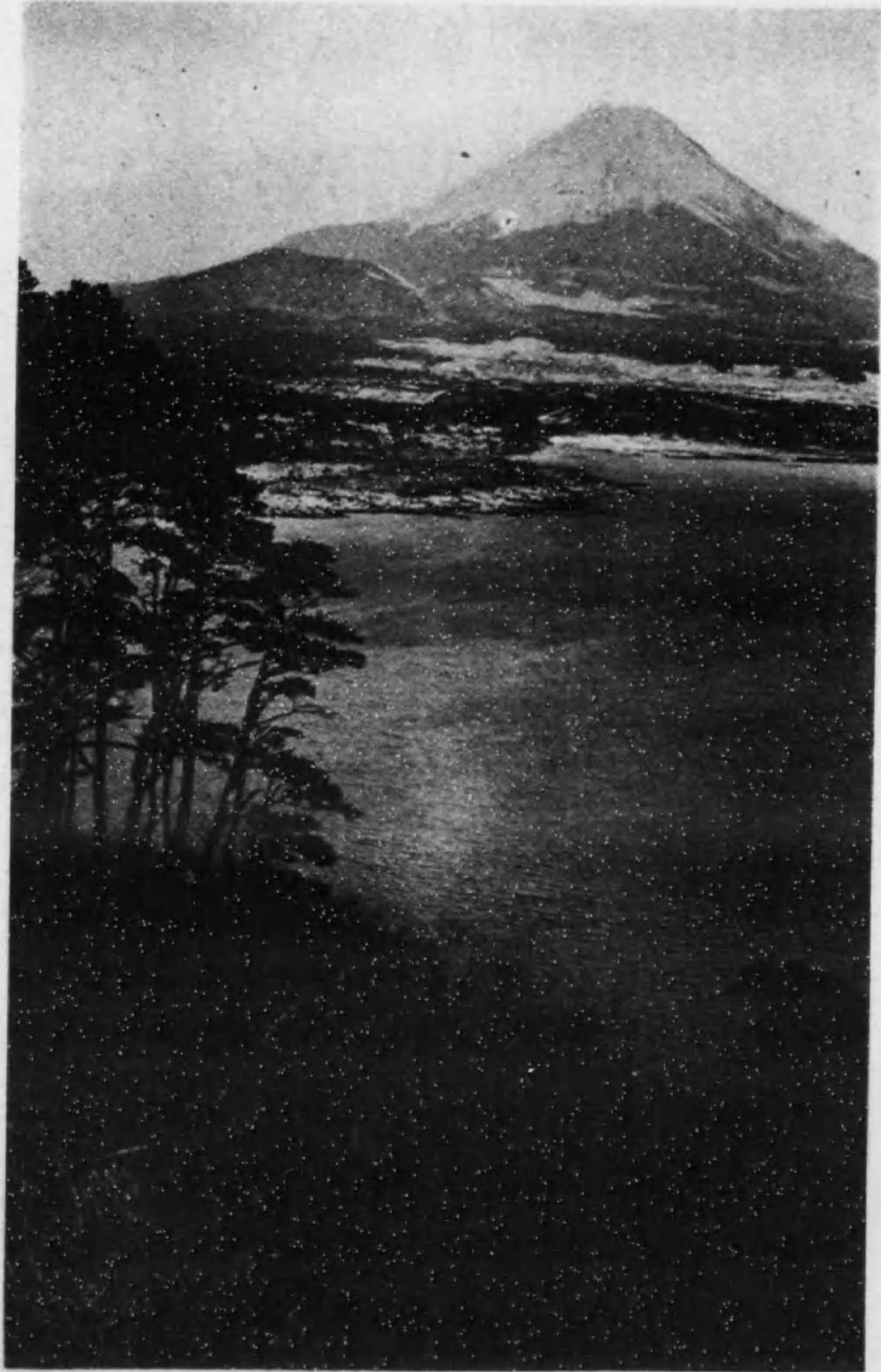
岳が格た見らか岳燕

第六圖版



第七圖版

岳が銷るすまらゝかの霧



第八四版

本栖湖から見た富士



御坂峠の富士

第九圖



第十一圖版



第十四圖版

上大武山(九千尺)
下大武上頂上(一萬六百五十五尺)

529-111

目次

相模の大山.....	一
瀧.....私雨.....箕毛	
明神岳の北面.....	二
更科日記.....二十八宿	
裾野の雨に.....	三
御殿場の宿.....東山	
難波津.....	二〇
香爐園.....大阪城.....奈良	
冬の筑紫路.....	二五
あたまかき山陽線.....雪の下關.....熊本.....江津湖.....栃の木.....氷	

大正
13.9.25
内交

れる阿蘇……球磨川……鹿兒島……櫻島……霧島の大浜が池……氷の華……夜の宿

山陰紀行

保津川……圓山川……玄武洞……日本海……島取……湖沼と砂丘……尾高……わけの茶屋……夜見が濱……伯耆の大山

四〇

浅せゆく沼と人の營みと

沼のめぐみ……そこに住む人々

五六

銚子の濱

愛宕山……犬若

六五

筑波嶺

女化の原……双峯

六八

筑波の初夏

唐澤山

秋山川……ひろきながめ

七四

七六

武蔵の金澤

七九

武蔵野の盡きんとする地へ

飯能へゆく友に

八一

多摩川の流

二俣尾……軍畑

八六

武蔵の御嶽

霞川……御師の家……奥の院

九一

〇秩父の話

寄居……波久禮……紅蔭片岩……ケツトル

一〇一

岩殿山

一一一

甲斐路

昇仙峽……富士川下り……身延

一一三

霧積川のもとへ……………一二一
ハクサンチミナヘシ……くえたる道

月夜の淺間……………一二五
小淺間……曉近し……火口の一角

淺間の麓にて……………一三〇
遠近の里……輕井澤……碓氷川の源……小瀬

輕井澤より……………一三五
鳥聲……水枕

碓氷のある地にて……………一四三

中房川から梓川へ……………一四四
中房へ……燕岳……大天井岳……槍澤……槍澤から……上高地へ……
 湖のおさを……徳本峠こえて

秋の日光……………一五九

秋の那須……………一六二
澤……鷄……硫黄ざる人……噴火口……大關家の狩

那須の粉雪……………一七三

○宮城野、松島……………一七八
名取川……鹽竈……瑞巖寺

東北の旅……………一八五

南海のおもかげ……………一八八

冬の車窓……………一九四

夏の思ひ出……………一九八

砂丘のもとにて……………二〇一

旅で逢つた人々……………二〇四

ことばとおもひと……………二〇七

目 次

風雨日記……………二一一

長崎紀行……………二二三

米澤へ……………二三〇

秋雨三日……………二三四

急行列車……………二三八

登山について……………二四二

あやふさ……東京にて山を仰ぐ……登山の道場……案内者……服装
と用具と

不二のつたへと不二行者と……………二五七

都瓦香……傳説の國……常陸風土記……縁起……神社考……駿河歌……
…竹取物語……詞林采葉抄……夢見がらの少女……鎌倉の將軍……
歌謡……曾末代……仙元講……物忌

山の聲……………二八〇

—歌に代ふ—

圖 版 目 次

圖 版 目 次

第一 淺間山 天狗の庭……………

第二 淺間山 火口のほとり……………

第三 初冬の燕岳……………

第四 夏の燕岳……………

第五 大天井岳……………

第六 燕岳から見た槍が岳……………

第七 霧のかゝらんとする槍が岳……………

第八 本栖湖から見た富士……………

第九 御坂峠の富士……………

次 目 版 圖

第十

大武山の頂……………

以上九葉、いづれも瀧の川なる山田應永氏のうつされたるもの
淡きは一等三角點、一萬六百五十尺の頂き、なほダイヤモンドガ
の巨樹を見る

第十一

大武山 九千尺の一地點……………

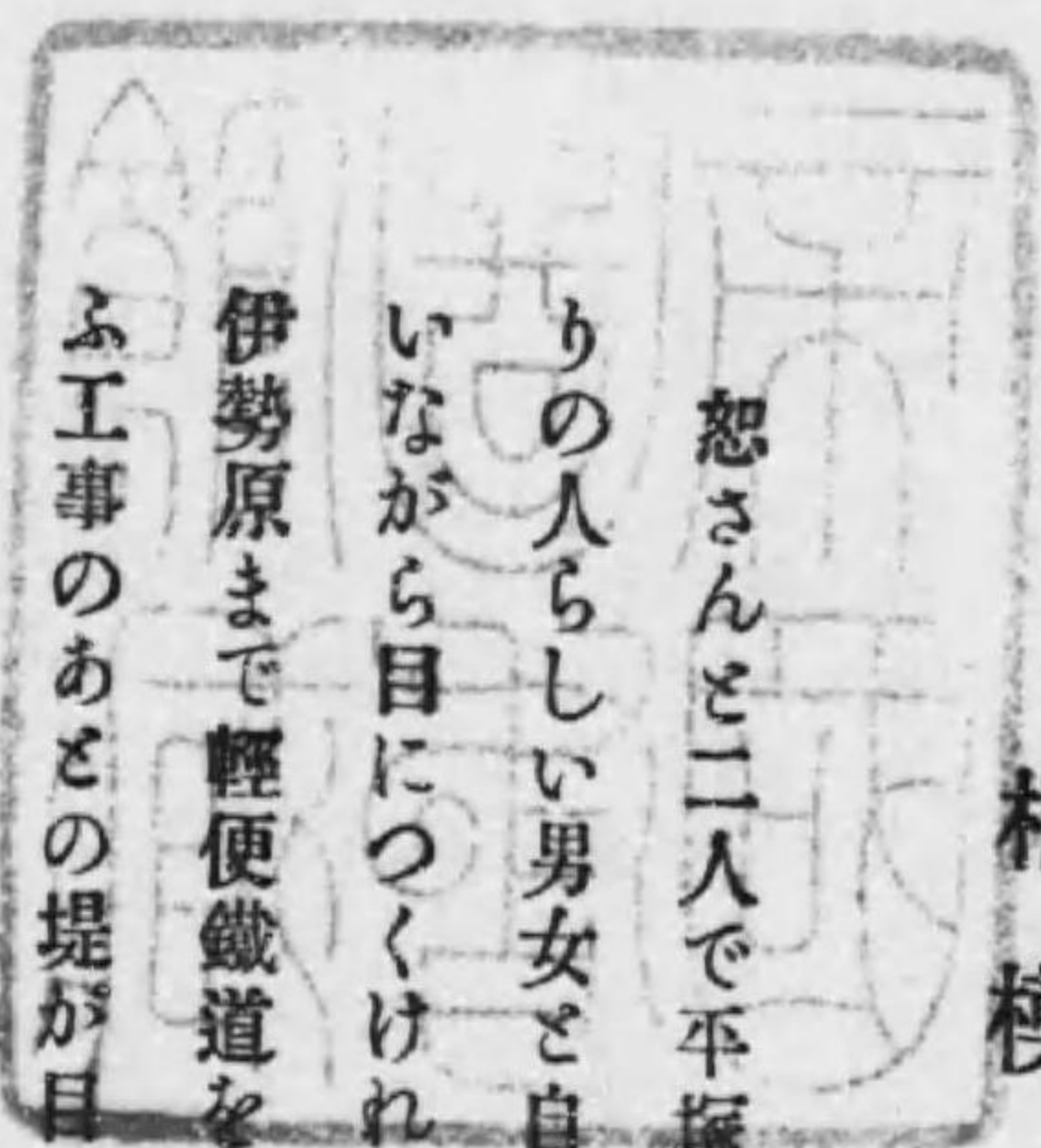
以上二葉、松田英二氏が産澤にて寫されたるもの

山のしづく

あしびきの山のしづくに妹まつと
われたちぬれぬ山のしづくに

大津皇子

相模の大山



怒さんと二人で平塚へついたのは、朝の八時半ごろであつたらう。横濱あたりの人らしい男女と自動車に同乗して中原を過ぎてゆく。手近い高麗山は、低いなながら目につくけれど、志す大山は、薄曇つてゐる。丹澤あたりも同じさま。伊勢原まで軽便鐵道を敷かうとして、期限が盡きた爲に其のまゝになつたといふ工事のあとの堤が目につく。昨日縣の内務部長が突然來て、乗合馬車で御者が乗合自動車の通行を妨げたのを見届けたので、今日は斯う巡査が警戒するのだと、土地の者の話に、御役人様も私どものやうに、あるをりだけ緊張なさるのかと、お氣の毒になる。

粕屋で自動車を降り、明神様の大きなく櫛の下を通り、子安地藏の址あとをみ

て、大山の町へとかゝる。御師の家々並ぶあたりを左へ、川に添ひゆくと、大瀧といふがある。大瀧とは名のみながら、境やや幽である。引きかへして登りゆく道のべに、いくつかの瀧があつた。愛宕の瀧といふのを少しよいとするなら、良辨の瀧とは千何百年前の高僧を記念するに餘り小さかつた。男坂の中ほどから右へ曲つて八段の瀧といふのは、溪流に過ぎないけれど、静なだけに、少し私どもを慰はせた。あとの瀧へはよらなかつた。

本社をあとにして、また登る石段道は、どこまでも続く。をりく見かへれど、私には、曇り日の海をそれと知らるゝに過ぎなかつた。いつか私どものはりの霧が雨になつた。いや平塚あたりで仰いだ時、嶺にかゝつてゐた雲の中に、私どもがはひつたのだ。十四丁めを過ぎようとする、風につれて雨の粒やゝ大なるに、休んで食事をする。茶屋の麥湯のコップ一杯四錢といふに、うち笑まれる。

なほのぼる。海よりの風であらう、霧を誘ひきて、山を背にした高い樹々にあてると、それが雨の雫となつて、ばらばらと珠をおとす。同じ途でも霧のゆくてを遮るものなき處は、地が濡れてゐなかつた。こゝの「私雨」とかいふのは、斯かる樹雨をさすのであらうか。

晴れてゐたら景色がよさうな所だねと、同行と語りあつたも幾度か、つひに頂上に達した。雨降木と称した木、殿めしい社殿、奉納の木大刀、大祭の無事を祈る行燈、鈴ふる祝^{はな}たち、それが此の山のある方面なのであらう。かしくむ人を悪いとはいへない。

霧はますく立て籠めて、眼界がずつと狭くなつた。石尊さまのまはりも少し廻つておる。下りは心も軽い。恕さんはイヌホ、ヅキか何かをどる。

十六丁目の分れ路で、此の度は簀毛へとおる。見かへる頂きは雲霧の中にあれど、わが歩むあたりに、もう雨はふらぬ。まづ木立を離れたのだ。それに

子易こやすからの道の谷間をゆくに比して、これは高みをゆく事とて、眺めもよい。左手の山の常磐木は、墨繪のやうに並びたち、正面には相模灘が擴がつてをる。右手の突出したのが眞鶴まげづるが崎、そのかなたが初島、左手に浮ぶは江の島であらうなどと、私どもは地圖をひろげた。淺間山と春嶽山との間の峰をゆくに、草山にかをるヤマユリととて、ほんの少し高みにのほれば、塔が岳、なほそのうしろに丹澤山が雲を冠つてゐる。この日の途では、このあたりが、最も私には快ろよかつた。

すでにして箕毛の部落、丹澤山路へのしるべを跡にすれば、こゝにも一二軒御師の宿があり、講中の旗が翻つてゐた。タバコはさすがに見事な葉をひろげてゐる。その彼方に箱根の山々が列をなしてゐた。秦野發の輕便鐵道にのり後れじと、やうやう馳けつければ、たゞ一輛の客車に空席もない。一色いっしきといふ地を通るに然るべき宅地跡の石垣のみ、もとのまゝなるを指して乗合のお婆さんた

ち、こゝが物持の卯三郎さんのあとだとして、非命にはたといふ人の末を談つてゐた。また一村雨、よきをも、悪しきをも、その物語をも流すやうに。

明神岳の北面

松田惣領、松田庶子、をかしき地名もあるものよと打ち笑まるゝ。停車場前に荷を預けて、西へ、南へと、下り氣味にゆけば、ホタル、カジカを賣るとの紙札、民家の門に懸つて、酒匂川の川原ひろく、川瀬は狭い。御殿場の裾合谷から流れてくる此の川は、曲りくゞて野をうるはしてゐる。川上なる黒き峰は矢倉嶽であらう。こゝからは正面の明神岳が可なり大きい。明星はあの靡ける左の肩かしら。

私はゆつくりした歩みを續けた。日が照るので、やゝ汗ばむ。路をよこぎる用水をも幾つか越えた。丘を少し登つて茅の花うつむく切通しを抜けると、關本の古驛、即ち足柄の關の下といふ義であらう。萬葉にあのあはれな歌を残し

た防人たちも、さては更科日記をしるした少女も、このあたりを通つたのであらう。

足柄山といふは四五日かねて恐しげにくらがりわたれり。やうく入りたつ麓のほごだに、空の氣色はかゞしく見えす、えもいはす茂りわたりに、いと恐しげなり。

と九百年前の少女は書きつけた。さういふ處へも「暗き夜の關に」いづこよりか「あそび」が三人きた。それに歌うたはせて聞くに、空にすみのぼる聲うるはしく、人々涙を流したと、かの少女は記した。頼朝の上洛にも、このあたりに宿つたらしい。この邊から、矢倉澤あたりまで押へれば、足柄は越えられなかつたであらう。悲しかりし時も、華やかなりし日も過ぎた。麥黄ばむ野、蠶眠る家、立場の札のみかゞつて、小田原通ひの馬車はどまつて居なかつた。しるべの石に導かれ、街道それで細き路に入る。小流は荻野川であらう。い

つか木山の麓にきた。喬木の下を例の二十八宿のしるしの道を登り、溪流を左にして、最乗寺の門をくぐる。

慧明禪師（五みでう）がこゝを開いたといはれるのは、足利義満の全盛時代である。「正に是れ諸佛の本源、即ち是れ慧明が自性なり」との師は、強い人であつたらう。それに聯る道了の話も、羽扇の陰にかくれた尊さがあるのであらう。ゆつくり休ませて貰つて、何百人でもお籠りの出来るお寺の設備に感心する。

おほかたは草山の箱根に、こゝの樹々生ひ茂れるは、喜ばしい。尤も、本木をきるものは頸をきる、枝をきる者は手足をきる、葉を截るものは指をきる、草を刈る者は髪をきるなどの、寶徳年間の掟は、基く所あるにしても言ひ方が強すぎる。なせ後文の「枝々葉々、祖翁皮肉」といふ筆法で、穩にとどめなかつたのであらう。さうせねば山が裸になるのなら、人の心もつれないものである。堂を離れ、左へをれ、右へをれ、木かけをゆけば、幾ほごもなく草山。みか

へれば、酒匂の流域ひらけ、丹澤の山々ならぶ。雪の明神岳を宮城野からのぼつて来た時の如き一人旅にもあらず、我がまゝのならぬけふは、海をも見ぬに引きかへさねばなるまいと、休むる杖のさきに淡紫のルリサウが匂うてゐた。

裾野の雨に

田植時どて、お百姓たちは、一家擧つて野に出てゐました。堤に足を投げ出して、薬罐のお湯を飲んだり、子をあやしてゐる人たちの顔には、思ふ事なげな、喜ばしい色が溢れてゐました。苗代は黄緑色なして、風を受けて居ました。畑には刈り残された麥もありました。

金時山の峙つてゐるのを仰いでゐるうちに、空は、いつしか細雨を送つてきました。箱根の溪流には傘をさしたまゝ、鮎を釣つてゐる鐵道工夫らしい姿も見えました。ホタルブクロが断崖にも鈴のやうに咲いてゐました。

幾度か絶えたり、開けたりした足柄道、更科日記の女性が越えた横走よこばしりの關、

さては竹の下道ゆきなやむ南朝の昔は、汽車の中でおもつたゞけ、卯の花さき亂るゝ野をすべつて、夕方、御殿場につきました。こゝは強い雨です。今朝からやまないのださうです。六月一杯降るのださうです。私は富士屋の二階に座つてゐます。

せん方なさに、また地圖を出しました。前夜、五萬分の一のを探つて、下の方に、やつと見つけた富岡村桃園、そこが多分、

世にふるはさらに時雨のやどりかな

の宗祇のお墓のある定輪寺の地だらうと存じます。それなら裾野驛のすぐ傍です。箱根に病んで桃園に葬られたといふあの諸國行脚の連歌師は、ごういふ道を迎つた人でしたらう。蹟は作にのこつてをると言つても、あれが宗祇の全體かしら。

わが爲にはゝきはかりはゆるせかし

うき世の塵をはきすつるまで

と山賊に言つたといふ話の眞偽は知らず。何とやら奥ゆかしい氣がします。地圖の上で、そこから少し北にのぼると深良村、蘆の湖の水が黄瀬川に合してゐる。自分が書いたものに縁があるので、いつて見たいやうな氣もする。どいつたどて、おもては吹降です。戸がひしめいてゐます。

私の眼は、あまり明るくない電燈のもとで、なほ地圖を辿つてゐます。御殿場——頼朝が富士の巻狩をしたをりの陣屋跡だと、その名を解いたのは、本當でせうか。家康の遺骸を久能から日光へ移す時の假屋あそこといふ方が、眞に近くはないでせうか。Murray の Hand book for Japan に

The passenger finds himself in the broad and fertile plain surrounding Fuji's base—a plain whose soil indeed has been formed by the outpourings of the great volcano during countless ages. Nothing here interrupts the view from

この fertile といふのを火山灰で、桑の發生によいといふ意とすれば、さらに趣があるかも知れません。もとより稻がなくては居られない日本人は水に沿うて少からぬ田を作つてゐます。富士の火山礫の上に立つて居るこの地點は、富士と足柄、箱根との間に、細長い裾合谷をなして、黄瀬川と酒匂川との水を分けてゐます。四百五十メートルの高みでも、斯う戸を閉め切つてあつては、蒸し暑うございます。

宿の女にまだ閑だらうと聞くと、「製絲がはひつて忙しい」とか言つてゐます。明治になつてから開けたこの口は、須山口の繁榮を奪つてしまひました。そしてこの富士屋なども、西洋人のお客は、うちばかりなど、威張つてゐます。

ここから北へゆくと深澤といふ處があります。富士屋の主人を呼んで、深澤

の城址は、どこだらうかと聞いてみました。さうしたら城は、上古城村でもなく、下古城村でもなく、小倉野新田のそばにあつたのだらうと言ひます。問ひつめると、古城川に両方から挟まれてゐる地點らしいやうな答でした。川向ですがその近くに中丸といふ地名の存してをるのも、何かしるべになりますまいか。北條家の黄八幡（綱成）が足柄と聯絡をとつて、深澤に築いて、甲斐と駿河とに備へたのは、小田原道にあたるだけ、當然の事とせう。しかし要衝ながら要害ではなさそうに思はれる。なにせよ、一路、北に通じてゐることは、龍坂峠こえて甲斐の兵士が自ら殺到してくる地點でしたらう。高坂弾正が郡内勢を深澤筋に押し出すだの、信玄が黄八幡に對して氏康の悪口を言つた深澤矢文などをおもつて居るうちに、夜が更けてゆきます。

もう寝ませう。

二

隣の部屋の蘭買さんの強い、ふとい、然しながら騒々しい聲が、いつまでも續いてゐました。その人たちを揉んでゐた按摩さんは、日本基督教會の信者とみえて、バラ先生の噂をしてゐました。さういふ話が、雨風とかけあひに、夜半まで聞えてゐました。

二時に覺めても、四時にさめても、雨風は強うございました。けふは歩くつもりでしたけれど、外套を持つてきませんでしたのに、雨の方では横降です。いつその事、人の足をかりませう。

宿を南に離れて新橋。藍澤橋ちかく來ますと、目指した中納言宗行の碑が、國道をすこし離れた處にありました。明治になつて立てたものです。そばにお社もありました。土御門卿が果してこゝで殺されたか、ごうかは問はず、關東の人は輦轂の下での處分を憚つて、いづれも東へめし下すと稱して、かういふ公卿衆を見えぬ世へ遷したのでせう。討つも討たるゝも、ゆきがゝりでありま

したらう。誤解やら、ゆきが、りやらを、後の人の眼に留めて、みんな流れて、ゆきます。數歩の地、巨木に乏しく、土饅頭もない、雨に濡れて、古碑を撫する心の境より、私はやゝ離れてゐたかしら。母衣の中、それに視界は十間、時に五間に過ぎません。雨煙る野には、草も、木も、片靡きになびいてゐました。武相の野では、もうさき過ぎてしまつた卯の花が、こゝでは真盛り、夏のくるのが遅いのです。ほんに「卯の花くだしさみだれぞふる」です。

細道で車からおりて、檜林をぬけました。地は火山の黒い砂でおほはれてゐます。雨も小止みになつて、鶯がなきます。シドメの咲き残つてゐるのを見つけると、まもなく東山の陂つみ、基督教青年會の建物は、すぐそのそばにありました。犬が吠えます。二棟の大きな二階屋のほかに、もう一棟工事中、來月の開校期までには、すつかり出來上ると、留守居の人がいつてゐました。

東山、それは御殿場附近の人が自然に附けた名で、實は、もう箱根の裾です。

會館は、日本第二の火口を有してゐる火山の麓に立つて、日本第一の火山に面してゐます。岩層は箱根でも、砂礫は多分富士から浴びせられたのでせう。火山岩上の青年會、それは、もう一度、大火口から火を降らすつもりでせうか。二つなき高い火山の火を浴びるつもりなのでせうか。それとも火を降らした昔を靜にかへりみるつもりなのでせうか。たゞ新しきにつくのでせうか、陂に船をうかべる位の軽い事に興するのではありますまい。

ふいに引いた Murray の御殿場の條には、あゝ Base から Summit まで見えるとありますが、御殿場そのものが既に Base なのですから、山が低く見えます。あの後の句はむしろ、青年會の方々が祈の丘にしてある處に適しはしませんかしら。Murray には、なほ斯うあります。

The long ridged wooded mountain, immediatly to the l. of Fuji is Ashitaka.

The range to the spectator's l. from the carriage window is the Hakone range,

lowest point of which seen from here is Otome-toge leading to Miyanoshita.

私は今、雲霧の中にあるのです。しかし青年會の方々は、きつと更に高みに登つて西洋人のいふ Maiden's Pass に立つて靈山の姿に見入る事でせう。そこには繪葉書の不二より、少しはよいものがあります。さらに登山の手引をしてくれるやうな、登るに易しい不二の根に立たれる人も多い事とせう。不二を見んとて乙女へ、さらに廣きものを見んとて不二へ、誰しも人は向ふ。

青年會のちらしには、「御殿場より東方約二十丁、道路平坦」とあります。然し長尾峠へ通ずる國道を離れてのちも人力車をすてぬ人には、「平坦」の下に「但し轍のあと、凹凸」といふ句が入らないことも限らぬ。これは車が横にひつくりかへつて脰にすりむきを拵へた青山の人の話です。

宿にかへつて、すぐ上り汽車に。雨は少くなつた。不二はすつかり雲の中ながら、箱根は薄曇り。須川の潭に聊かの趣きを覺え、山北に來れば、ちどの青空。こゝは昨夜もさう強くは降らなかつたとの事。松田では箱根の連山が、き

のふよりも色鮮か。神山と駒が岳とこそ雲はおほひたれ、金時のかぶとは嚴めしく、あすこの横の乙女をこえようかと草鞋の用意をすしていつた自分をからかひ顔。それも暫時で、細雨は相摸野を。

(五、六)

難波津

三四日の旅に過ぎぬを、FとHとに送られて立つ。隣席のカナダの客の、昨日とか日本についたばかりといふに、不自由かどつい受け應へをすれば、駄問、俗問盡くるを知らぬ。急行車の夜は近江に明けて、琵琶湖の水は此處にひろく、比良の雪は彼處に耀く。寒き京都の朝を食事せで待てりといふAとYとのお二人に氣の毒なる思ひをなしつゝ梅田につけば、走りよるCさん、Kさん、さては初見參のA牧師。人の情をそのまゝ受けて、西の宮の在なるKさんの家に迎へられる。

家は武庫郡なる甲山かよこやまの正南にある。北には攝丹の山々走り、南には海。高きに登らば、時に和泉が霞むであらう。私のやうな物好きには、夙川しゆくがはといふ名も

奥をひく。そのの堤には長松、風を呼んでゐる。庭の梅の蕾のふくらめるは、春の他よりも早きを告ぐるのであらう。

樓上の客間は京間の八疊、そこに凭るべき唐木の机あり、次の八疊には、ややもすれば寝ねんとする我に臥床あり、北なる應接間は山の翠微を觀るによい。Kさんとその背の君とは、我がまゝな私を煤煙の都からこゝへ救はれたのである。

大阪城のほどり、電車に程近くして而も静かなる地に、東部教會は建つてゐる。練達せるA牧師の希望に副ふべくもあらぬ身も、こゝに會衆まひらに見える。物々しからの會の空氣喜ばしく、それを産み出だす牧師の心もちゐるが極めて嬉しい。けふは押し照るや難波入江の昔から、殿を建て、都をひらく人の心を談る。故舊にも幾人か。

會後、牧師に導かれて大阪城をみる。信長の出鼻を挫いた石山本願寺、そこ

にはどのやうな人たちが籠つてゐたのであらう。それが退轉して後に現れいでたる大阪城、城は本丸だけになつても、その城代は威を振うてゐても、町の人々は徐ろに一種の文明を造り出した。天主閣上、人あらずして、暮靄は大都を包まうとしてゐる。

きのふからの俄大名、勿體なくもあり、少しをかしくもあれど、何事もそちらまかせと、一茶ならぬ身の、かの二人に導かれゆく。西ならで、電車は東の方、奈良へと。

生駒もぬけた。軌道は平城の大内裏あとを横ぎつてゆくらしい。さらに戻り氣味に汽車へと移るは、法隆寺を見させようとの友の志である。ひろやかな車中、二人の語るをきつ、物思もない。汽車は生駒山系を北にしつ、大和國原を走る。圓をかける我が行路のをかしさよ。既にして法隆寺村、暖き日を浴びて、一路北へと田間の途をゆく。小草はもう芽ぐんでをる。南大門のあたり、

Cさんのレンズには、まぶしい面輪がはひつたであらう。寺中は一種の別天地、私が僭越に何をいひ得よう。その吉祥天のはかは、いづれも私を尊い法の境へ誘はれる。私は黙したま、一の像より他の像へとうつりゆく。金堂のも、寶藏のも、人に物を思はせる。古人のある生活も、古人の眼にうつた浄土と。その諸佛の御姿も仰がれる。貴族の文明、よし民の心は濕はざりしとすとも、この高波を、誰か笑へよう。堂をも、塔をも、私どもは見まもつた。

また奈良にわが身を置いた。南圓堂を仰ぎ、三重塔をや、高さより見、タチバナに八衢ゆきし昔をしのび、東大寺から三笠山へと、一通りの行客のめぐる所、ひらいた境を、木立のまを、あわだしく過ぎて、夕また淀川のほとりにかへる。

その夜は會堂にて、人にゆるされたる創見の事どもを談る。舊友の會する者幾人。歸途はじめてY兄の病をきく。幸に夜ふけて君のかへるにあふ。

日曜の朝、Bさんにつれられて會堂にゆく。主の心によみがへる日の事をとく。會後また故舊とかたる。思ひわかざりし故人の、ことばかはす聲音こゝろの中にかへりくるに、そのかみの思はれる。

夕は奈良へゆきし二人と食膳を同じうして、また御堂へゆく。最後のくだくだしき物語をも、人々は忍んで聞いて下された。

疲労の残りをるべきY兄まで、とく起き出で、風寒き朝を梅田へ送られる。この行は、私に大阪をある親しいものにした。それも友の情である。近松の世話物にある人物さながらのお婆さまを、電車の中に見るも嬉しかった。さらばよ難波津、さらばよ友。

(八、一)

冬の筑紫路

阿蘇から霧島へ

つくしなるおほわたり川おほかたは我ひとりのみわたるうき世か

よみ人しらす

あけの明星が京都の空にかゞやいてゐた。黒い横雲が煙をあげたやうに、その下にあつた。大阪に近づくに従つて、その星の光が淡くなり、空が日を生まうとする。來るべき者をまつほのあかり。小丘を畫き出した空の線が次第に強くなりゆく。汽車の煙は白い魔のやうに飛ぶ。空際があからんで、空の青もはえる。そして畑の青の見えるところには、星は隠れてしまつた。

晝の光がまともに六甲山脈の山々にかゝる。山はそれを肩にも、胸にも受け

て笑みかはしてゐる。洗ひ出された紫の山なみ、誰か、このあたりを俗地といひ得ようぞ。日かげよ薄るな、山も榮を失ふな。

須磨、舞子のあたゝかさは、年の暮を咲く桃色の薔薇にも、木の葉の光澤にも、知られる。日は曇りそめた。海は水銀のやうに重く沈んだ色になる。それでも淡路島は、綿津見わたづみの神のかざしと、波に乗つてをる。

加古川あたり、景のやゝ廣きを覺ゆる山々のおもむきもよい。少し過ぎると白崩れ。それからまた高からぬ山の波。

市川あたりから見た姫路も、うるはしい。山は幾雙かの屏風を立てゝゐる。

夢前川ゆめまきがはも、千種川ちづかも、うるはしい。山の間を滑つて逃げて來た水は、山の懐をそと遙に示してゐる。母なる山は、別に衣紋を繕はうともしない。

舟阪のトンネルは何を語るか知らず、三石みついしあたりには耐火煉瓦をこしらへる會社がある。乗合の岡山縣人は、關西の富を誇つてゐた。

吉井川の流ることもなき流に、親子であらう、小舟漕いでゆく。その上にも暮雲が、かゝらんとする。

(五、十二、二十六)

窓によせたる肩のちと寒きを覺ゆるに三田尻あたり夜は明けぬと、車外を見れば一面の白雪。

下關の雪にはすべる誰彼もあつた。早鞆の瀬戸はやゝ荒れてゐた。門司にわたるまの寒さ。それにどうしてか九州鐵道にはスチームが利いてゐない。

大里ゆけば、こゝの驛にありし若き人の事など思はれる。

海は濁つた波を揚げてゐた。雪はやみてまた降る、ふりしきる。博多あたりは吹雪。

久留米過ぎてやゝに晴れる。裸樹ながら百枝を横にひらいたハゼと、黄いろな實をつけたセンダンとが、群をなしてゐる。矢部川の流は、水が清かつた。

木葉、植木、さういふ驛の名を呼ばるゝまゝに、私はあたりを見まはした。眼に入るは草山、風がよくして聊かの雪をちらす。

上熊本ではUさんに迎へられた。高みを登つて更に降らんとする時、人力車をどめて、「あれが」と指された前面は、雪の冠つけた阿蘇の山々。

Fさんや、Wさんにあふ。車中の二夜さ、眠をなさなかつた身も、主人の情に包まれて、あたゝかに寝る。

(二十七)

お天気、W君につれられていつた水前寺、浅い水には、ハヤや、鯉などが泳いでゐる。こんなにあたゝかいのだと、日の織り出した細波をみやる。

W君のしるべが出してくれた新しい小舟、それに乗つて私たちは江津湖の一端に出た。おちついた湖、その中にはひつてくれた青年が、浅みの水をうごかす。藻がうかぶ。青年はそれを掬うて舟端にのせる。私は水を離れて丸くなつ

たその藻を手にとつて見る。何がわかるでもない。私は水前寺海苔の名に聞きほれて、人々を勞したのだ。生のはじめのさまを如何にとおもうても、自然は軽々しく口を開かぬ。

列車は、うらがれた老杉の路を東へ々と走つた。線路は次第に高くなつた。白河は眼下に流れてゐる。車をすてたのは、立野。火口瀬。馬車で朽の木へ。「冬阿蘇へいつて何がありますか」と、乗合の阿蘇少女は聞く。小山旅館のあたにかい蓼の湯、それに浴しつゝ、川の瀬を見る、岩をみる。も一つの大きい湯は、今はぬるすぎる。室は鮎返りの瀧に面してゐた。水の細きは、氷柱と化して下つてゐる。三尺、四尺、五尺、それが、かの瀧を見事にしてゐる。風心地。

(二十八)

この気分ではと案じられもすれど、途中までなりとも、八時過に宿を出る。

案内は女、阿蘇いかにやさしいといへ、冬なのをと思ひつゝ、彼をさきに立てる。すぐ左の氷れる徑に入る、登れば幾程もなきに、後に金峯山、さらに温泉が嶽がそれを越えて、西の空に浮ぶ。白河の溪谷は、低く朝霧を生んで、湖面のやうに擴つてゐる。私は草あをき高原に立つてゐた。阿蘇の峯々、烏帽子、杵島とうちならぶ。いつか小徑、さらに一部落を経て、雪まだらなる湯の谷温泉。湯の香の家に一休み。(九時半)

また急な坂、萱にかくれたる雪を踏みてのぼれば、眺めは遙か。後は一帯の外輪山、高低殆んどなきかと計り、環をなしてゐる。風にさいなまれつゝ、坂路をきはむれば、こゝ千里が濱、古い火口の蹟ときく。柔い砂の原。中岳が正面に立つ。下りつ、登りつ、石塔のすたれしを見やり、つひに頂上のお社、宮の幕は張つてあつたれど、そばのお茶屋は寒いので閉ぢてあつた。(十一時廿分)

風をつき、煙をさけて登る火口のはこり、氷れる火山灰をふみしめて見おろ

せば、掘られ、ゑぐられ、刻まれて、雪をのせたる無数の裂けめ、割れめ、底は熱池、青き湯のたぎるもある。斯の如きもの四つまた五つ。私はそのふちを南から北へと傳はつていつた。空は曇つてゐた。火山灰の上なる氷は、尖端、地に三鱗をしける如く、霜柱をかためて横にしたるが如くなつてゐた。

正午再び社に戻つて、同じ道をさる。氷がとけてあゆみにくい。千里が濱の手まへの登りで、杖も折れた。雪多しとて案内が避けた垂玉路たるたまみちを歸路にはどつた方がよかつたらうにとおもはれた。泥は足をすふ。二時すぎ湯の谷の茶屋まで来て、草鞋のまゝ爐に足入れて、お茶漬を流しこむと、食道がきり／＼といたむ。

ぬかるみをやうやく逃れ、疲れた足を高原にひく。三時半ごろ佳景にわかれて朽の木におりた。

湯に入りても食氣おこらねば、玉子をのんで、城岩、右手に白河にそうて下

る。立野につけば燈火がきらめく。息がくるしい。

(二十九)

こゝ大江の九州學院。廣い敷地、ゆつたりとした校舎、阿蘇の山容の仰がる窓、それよりも棟を異にした特別教室は、私をよろこばせた。動植物、物理、化学、歴史、地理、圖畫、習字、いづれの教室にもそれだけの趣があつた。準備室の石壘、理化室の机、それを踏む人、それにむかふ若き子の上に幸あれ、生徒の圖案の巧みなのも心地よかつた。数々の標本、さては器械、それを見る眼のかゞやきより後の何者かゞ出でようぞ。

主夫妻の心くばりに舊知とも會し、午後の薄日を浴びて、熊本からFさんとともにこんである列車にのる。近づきになつた金峯山もおくつて呉れる。

八代すぐれば球磨川が見えそめる。舟あり、舟子あり、木材あり、青の水は人の心をどらへてゆく。人吉のあたりまでも、阿蘇の溶岩はあるとか。それを

いづれと知るよしもない。こゝの水路を拓いた林正盛は、ごういふ人であつたらう。私はたゞ眼をみはる。Fさんはさうも見てゐない。いつか暮色がせまる。

(三十)

鹿兒島は柑橘の街、石垣の街、そこに強い酒を味ふ酒客もあれば、いくつかの教會堂もある。その一つに詣で、Y牧師の「勝算ありや」といふ説教をきく。M國手に診察してもらふ。その見事な屋久杉の天井をあふぐ。(三十二)

舟をやどうて櫻島へ。Mさんたちも御愛相にいつて下さる。一行五人、昨日の國手の話で、登山を控へ、舟を尋常に城山方面へむかはせる。流れ出した熔岩の上からは、白煙が今もたちのぼる。袴越のあたりからものぼる。片靡きした開開嶽かいんたけが見える。それと違つた方に霧島山が雲間からをりく現れる。霧島か

ら櫻島、開闢、琉黄島、諏訪の瀬どひいた一線、地は脈をうつてをるのであらう。

灣内の水は清い。手を入れて見る。島に近づくに従つて、それがあたゝかになる。水面二三寸までは、あたゝかいと甥がいふ。

荷を高みの家に預け、怒りて黙せる熔岩にそうてのぼる。左手は雑草、右手はまだそれを容さぬ焼け爛れた岩塊、その一地點に少しく進めば、見わたすかぎりの熔岩、彼らは生物の所作を笑ふが如くに群がり、誘ふ如く、また脅かす如くに、その國を立てゝゐた。かたき石、柔かき岩、歳月は、こゝをどうするものであらう。

里には家々が新に建つてゐた。日の丸の旗もなびいてゐた、子らは「繪葉書買って下さい」と節をつけていふ。火山弾なども賣つてゐる。豚がうめいてゐる。カライモの蔓には、小さい芋がついてゐた。サタウキビは大きいのもな

かつた。新に出来た温泉は、可なり熱かつた。島人同士の話は、わからなかつた。

鹿兒島市の背後の城山公園。そこには冬の椿が咲いて、床机に酒を汲む人たちもゐた。櫻島の裾から見たよりも、こゝから彼方を見た方が、日ざしの工合か、景は勝れてゐた。奥は静か、岩崎谷に南洲翁の墓を圍まれたといふ洞を尋ね、再び丘をこゆれば、伐りたふされた樟が香を發つ。あゝ風雲、何によりてか起り、何によりてかをさまれる。マメヅタはふ石垣の中は造士館、そをおもふ人もあらう、その蹟をつぐ人もあらう。

(六、一、一)

牧園驛に列車から立ち出づれば、さても寒い事。馬車を賃して霧島の丸尾へむかふ。もとより坂路、日は照りつ、また曇りつ。風は時に雪をともなふ。寺原を經、種馬の牧場を過ぎて、丸尾についたらもう三時ちかい。おそい中食を

したゝめて、すぐ大浪池へ。

かの國手の別荘の世話をする人が先に立つ。おそいので急ぎ足、萱原をこえ、深林をくぐる。少しの高みで、もう高千穂の烏帽子がたが、鮮かに仰がれる。林には、つゞしましい蘚苔の茵がある。それがみな模様をこはさぬほどの淡雪を載せてゐる。老木の倒れたのもある。それを越えもし、くゞりもする、ここは隠された世界であつた。そこにも花は咲きて散り、木は生じて朽ちてゆく。我らも生物、その中に僅のあとをつけてゆく。

また明るい世界に出た。風が強くあたる。日は、まつたくかげつた。私は山の斜面をゆく。まあ、この氷の華、みおろした樹といふ樹は、裸なもの、常磐なもの、いづれもすつかりと、氷の玉、いや氷の管玉をつけてゐる。瓊林、玉樹。しかしその色は沈んでゐた。眠の國に、黄泉の國にさく花あらば、斯く咲くであらうか。春の花の御山から淡紅の色を奪つて、黙せる死の色を添へたや

うな趣き。どんよりと曇れる天地、陰に籠る。

萱をたよりに雪を踏んで、のぼりつめた千四百餘メートル、まるい大浪池の半をかくして立つ夕霧は、當面の韓國嶽をさへ隠してゐた。湖は静にして寂、人は黙して聲を吞む。身にしみわたるは、寒さのみかは。

爐には楮火が燃えてゐる。國手の別荘、食事を運んでくれた坂の下の主婦の言語は聞きとれぬ。その人のかへつてからは、冬の山家に甥とたゞ二人、湯の桶に故障ありとか、こゝの湯壺のぬるければ、人もなき隣家の浴槽に入る。温泉がさつと流れる。提灯は風にうごく。そのかりそめの光の外は、黒暗々。

宿の戸をさゝんとすれば、雲を破つて月が出てゐた。海がひらけて櫻島が下にかぶ。佳景、されど體はふるへる。風が夜一夜、山をゆする。(二)

朝おきいづれば空は曇つて、雪がちら／＼。顔あらふ浴槽にも、粉雪が舞ふ。

けふの日程の高千穂ゆきを断念して、引きかへす。案内者も斯う寒くなつては、およしなすつた方がよいといふ。昨日の風に高千穂へのぼつた人と、道連になつてきけば、あちらは粉雪だけとの事。

(三)

四日の朝、鹿兒島をたつ。雪紛々として衣に粘く。矢嶽あたりは殊に雪が深かつた。

雪の人、氷の人を九國の山河ひかへてしろたへをしく。

聊かは熱もあるらし、脈はやし、そをあざみつゝ山の雪ふむ。

九國にきての嬉しき日なりきといひつる人も寂しかるらん。

たのしげに語らひてゆく七高の子らのマントに粉雪のふる。

枝ながら島蜜柑さげて、ふるさとへかへりもゆくか、七高の子は。

七色の虹のごとくも球磨川の水は光を吸ひて流るゝ。

砂きよし、いはほはこゞし、深き浅き瀬々またうれし球磨川の水。
關門の連絡船のたゆといふ、それをも旅の興にかぞへん。(四)

朝な朝な世をしらす子と日は生る、何を生むべき我の生命ぞ。

わがおもひ、わが世もいつかかはりゆく、かへりみすれば遙けかりけり。

(五)

微光、もう富士が見えそめてきた。模糊たる境から、峯の一角がうす白く抜け出てきた。それが白に、やがて白金のつよきに變じて、全山のひだが著くなる。日が出たのであらう。山は朱紅色に映えてゆく。寶永のかげだけが黒い。やがて前の愛鷹があかくなる。富士はたゞの白にかへつて、乗合の眠もさめる。

(六)

山陰紀行

大海の底を探ると我が生をおもふ時あり、息もえせねば

八月五日、近江路にめさめて、私はそんな歌を口ずさんだ。草津あたり、幾つかのトンネルの川底を貫いてをるのに心づくど、そなたの乗る列車にふさはしいのだ、いや、川の底どころか、海の底を徒らにかい探つてをるのだと、自らを笑ふのであつた。比叡は峰を雲に包ませて、大湖のかなたに立つてゐた。

京都で朝八時發の山陰鐵道にのりかへる。修理の届いてゐない車室であつた。それに定員以上をのせてゐたであらう。熱くなつてゆく。山近くして重嵐逼るどにや。保津川の淵は緑に、瀬は白く、水は岩を噛んでゐた。川をひらいた了意以後にも、幾度か水が出て、岩を新におし出したであらう。川は初め車窓の

左に少しく現れ、のち右に長く現れる。八木だの、殿田だのといふ地は、了意をしるした漢文で、私の記憶に残つてをる。そこは山かげの里であり、桑の里である。いつか東流せる保津川ならで、西流せる和知川が鐵路をみちびいてゐる。その和知川も狭い、急な溪流から、廣いのだかな川に移つてゆく。すでにして、鐵路は、和知に合する牧川に誘はれゆく。

夜久野^{やくの}あたりは高原のおもしろさがあつた。キ、ヤウが咲き、ヲミナヘシがくねつてゐた。山の裾に玄武岩の見えるのも、玄武洞の先容をなすやうに。

道はまた圓山川の淀みにそうてゆく。豊岡へくれば平野である。こゝにも甲府盆地や、阿蘇などに傳はつてゐるやうな傳へがある。こゝのヒーローは大己貴命^{おほみこと}で、瀬戸から水を北の海に落した、それで湖なりし此のあたりに、大地あらはれたりといふ。但馬は天の日槍^{あめひやり}の物語に縁ある地である。此のゆるやかな傾斜が、古への人々を遠くから招いた。そしてこのあるか無きかの傾斜が、今

の人々を出水に苦しませる。なにせよ、山城、丹波、但馬を貫く此の道は、保津、和知、圓山の川々に誘はれたものである。海の彼方から来た人すら、川に誘はれて、奥深く入り込んだ。奥深くといつても豊岡あたりの圓山川は、潮の満乾につれる入江である。いや潮は、時にもつと上流の出石邊まで及ぶどか。北海を距る事七八里、その山間の地にすら、潮のさすまゝに、日槍たちは、さかのぼつたものであらう。見よ、あの白帆かけてゆく船を。

列車に洗面の設けの整はぬまゝ、豊岡で私はやつと顔を洗つた。そして次の玄武洞といふ寒驛でおりました。車室を同じうした人たちは、次の城の崎さきでおられるらしいのに。

私はたゞ一人、渡船にのつて、淀みをなしてをる圓山川をわたつた。川幅もひろく、流もゆるかつた。水草の蔭に圍まれてゐるやうな舟つきにおりたつて、少し右へゆく。そして玄武岩の石段をのぼると、見事な蜂の巢状の洞が仰がれ

る。菊池五山の

峰窠懸欲落、氷柱垂且長、

といふ起承の二句は、よくそれを寫してゐる。穴は三つに分れ、右手の洞の上からは、いさゝか瀧めく水が落ちてゐる。をりく石が落ちるとて、洞の中に人を入れないやうにしてある。

ときじくのかぐの木の実をとりきにし人やすみけんこのかめの洞

季 鷹

とは、遠望のをりにふさはしい。石をとつたあとにもせよ、近よれば自然は歌よりも大きい。岩の柱は高さ數丈をもて數ふべく、洞の全長は四十間とか。龜甲形の石は、すくくと立つてをり、はた垂れてをる。この洞の背後の山にして深からんか、あたりにもつと潤ひがあらうものを、それでも右手の高みにある不動堂のほとりは、さすがに涼しい風が吹く。

なほ右の徑を青龍洞といふのへゆく。こゝは玄武よりも、さらにあたりが乾いてゐた。それでも玄武あらずば、人を駭かすに足りるであらう。こゝのは柱状の岩もやゝ靡いてゐた。

さるにても、今、川の左岸になつてをるあたり、烈しい火山が、大地をゆすつて起き上り、天も焦げよど鐵の熔けたる如き玄武岩の汁を吹きいだしたそのかみは、ごんなであつたらう。今、岩はかたく、川はしづけく、人ものごかに生をいとなんでゐる。母なる地よ、燃ゆると静けきと、いづれが、そなたのまことの相すがたなのか、そなたの子はそれをきかせてもらひたい。

渡船をまつて引きかへす。列車のくるまでの時間のありすぎるので、一人驛にまつ。驛長の他には、子どもの驛夫一人ぐらゐで、始末をしてをるらしい。三時すぎの列車でまた下る。城の崎で、人々がおりの後は、空席が多くなつた。列車は数々のトンネルを通つてゆく。トンネルの合間々々には、日本海が見え

る。私は山陰線の工事をたゞへる。そして日本人の力をおもふ。それは今初めて現れたものではない。人は自然に誘はれる。誘はれゆけば、一つの水の一つの所、分水嶺を越して、彼方の水へと下る餘力は存してをると見える。

いさゝかの入江々々に四五軒の家など見えて海さ青なり。

鏡よろひの停車場あたり、日本海がまことに美はしい。たゞ窓の開閉が依然として忙しい。それにひどく暑かつた。夕近くなるころ、鳥取市についた。甥は鮎をどつて、かへつてきた。私は因幡の八上やがらひ比賣ひめの國についたのだ。南北兩朝を合せんとした山名時氏の國、香川景樹の生れた國、稻村三伯の國についたのだ。

八月六日、久松山下の家で、因伯記要をよむ。午後公園を経て、舊城にのぼる。今はまだ手続きをせねば登れないのだとか。城趾には松が生ひ、葛が蔓をのびしてゐる。いかにも形勝の地である。秀吉に對して六ヶ月間こゝを支へた吉川經家の事は、さすがに尊く感ぜられる。いかさま力攻にはしがたかつたで

あらう。城から市街を見わたしたながめは、海こそ見えね、鹿兒島の城山から市を見おろしたさまにも似てゐる。

甥は私を玄忠寺といふ浄土寺へつれていつた。そこには荒木又右衛門の墓がある。墓石が割れてゐるので、金網がかけてあつた。數馬の弟の殺されたのが寛永七年の秋、それが池田侯對旗本の争ひの如くになつて、やうやく仇を報じたのが同十一年の冬、さる後にも身邊危く、こゝに歸つたのは同十五年の秋、そして僅に十數日にして死んだとある。彼は四十歳ほどで死に、數馬は寛永十九年の冬、三十五歳で死んだ。仇を復さではと仇をかへす。そして本望を遂げたといふ。それだけが人間の執着かしら。おもへば私にはいたましい。(數馬の墓は興禪寺といふ黄蘗宗の寺にある。その傍らに荒木の子の墓もあつた。それを訪うたのは、九日の事である。)

八月七日、十一時半でろの列車で、伯耆の大山へと志す。東西三十三町、南

北廿二町といふ湖山の池が、こなたは砂丘に圍まれてゐる。いや、あれは千代川のもたらす砂によつて、もとの海が湖となつたのであらう。湖山池は、もと長者の田地であつたのを、田植を一日の中にしてしまはうと國中の人を集めて植ゑさせたのに、も少しといふほどに、日が暮れそめた。何でもといふ心持ちから、長者は金扇をあげて日を招いた。落日はまねきかへされたが、天罰たちまち降つて、一夜の中に田が湖となつたといふ長者傳説である。寶木のそばの水尻湖も、砂丘の生んだもの、その水を海におとして、人は地を得んとしてゐる。東郷池をも過ぎた。

由良あたりから、船上山はもとより大山が見えそめた。長年を祀れる名和神社のあたりを、列車は飛ぶ。夜見の濱があらはれ、出雲の半島が視界に入る。そして伯耆大山驛へ。不二形の大山は、儼として聳えてゐる。

尾高といふ村から來た馬にのせられて、驛を立つたのは、午後三時近くであ

つたらう。あつい田甫路、一枚一枚の田にお札のさしてあるのを蟲よけかど聞けば、馬子は神經休めですといふ。私はそんなよそゆきの挨拶をきたくはなかつた。美保の神様のお札ならお札でよいものを。

山中鹿之助のがれた尾高を經、岡成をすぎ、佐陀川の川べに出て、それを右にした道を赤松へと進む。大山はいつも殆んど隠れない。次第に緩い登の路、遂に見事な松の左右にある高原、眞直につけた廣い道をゆく。一町ごとに石の地藏様が立つてゐる。孝靈山をも背にした。船上山もさう高くなつた。桔梗など手にもつて、山から人はかへつて来る。マツムシサウが少しさく。蠅がうるさい。このあたりは昔ながらの牧である。そして近年まで軍馬の放牧地であつた。それが廢せられて、今はわづかに形ばかりを止めてをる。馬の數も少いらしう。

分けの茶屋に休めば、お婆さんがサルトリイバラか何かの葉でくるんだ餅を

出す。番茶も型の如くいぶりくさい。見かへれば弓をなす夜見が濱、米子、中の海、松江と、かなたに廣い景が開ける。老松のもとをまた進む。途つくる所、左方に牛馬の市たつといふ博勞座といふが見えて、鳥居が正面にたつ。

そこで馬をすて、右にをれて、佐陀の川原におり、また上りて、蓮淨院といふにつく。もう夕である。風呂に入りて、座にかへれば、木の間もれくる夕映は、眞紅に燃えてゐた。心づけば、老杉の梢高く、三日月が懸つてゐた。

八月八日。講習會に来てゐる隣室の青年たちが、夜、襖を蹴るので、家鳴り震動するやうに覺えて、一睡も出来かねた。高城村たかしらの村長の選挙に、村會議員一同、御神託を伺ひに美保の關に神詣をしたといふ昨夜の話は、事代主命ことしろぬしのみことだけに私の興をひいたけれど、馬市の立つ時でもないのに、かう蹴られては、武人ならぬ私は、夢に入る所でない。朝の三時、提灯つけて、山にのぼる。案内は相當の老人である。

阿彌陀堂といふ所までは、廣い道であつた。杉も大きかつた。そこから山路にわけ入る。ブナ林、木膚の白が闇にも知られる。大きなイハカミの厚い葉が、提灯の火に照らされる時もあつた。月はもう沈んでゐた。林の中は風がないので、蒸し暑い。路の轉ずる處で息へば、米子の町の火が赤く下界に點つてゐた。林は長くつゞく、イタヤカヘデ、リヤウブ、ツガなど。切れたかと思ふと、また現れる。その中に巨木もなくなつた。いつか東が白む。雲の海に、紅の日のぼる。日の上の雲が小き羊の群の如くに、魚の鱗の如くに美しい、勉強家の虻が早くも飛んでくる。馬の背のやうな處をゆく。あすこに雪があると、案内は絶壁のもとをさす。爆烈火口のさげめに残つてをるのであらう。私にはゆかれさうもない。またよくも見えない。聞けば大山寺は金の鳥居邊で一丈あまり、さらぬ處でも八尺はつもるといふ。さうなら中國での深雪地であらう。山の雪は上と下とがとけて、中のが残る。木の葉が雪の上をおほうて、またそ

の上に雪がつもる。それが三段になつてをるから、三年もの雪があるのだなど、案内はいふ。

高山のとはちがへど、お花畠のやうの所も、三四ヶ所あつた。花は紅のシヨウマ類、紫のトラノヲ類、白いシシウドのたぐひが多かつた。ダイモンジサウのさき亂れる所もあつた。赤いユリは少かつた。

見かへれば彼方に隠岐の島が浮ぶ。一つまた一つ、波に淡い。息を入れてゐると、少し寒い。大山は等邊三角の影を他の山に投げてゐた。

やがて草地、頂上へゆかずに、そこを右へゆく。小い石室が新に出来てゐた。屋根はまだない。風もあたらぬ。小い池が二つほどある。ツガカイチキカが地をはうてゐる。こゝなら露營する事も出来よう。こゝの眺めは、まだ西北―伯耆、出雲の地と、海と、隠岐の島山とである。

轉じて頂上、こゝの景は前のよりも大きい。中國の背梁山脈が見え、山陽の

盆地を雲が白く埋めてゐた。空は澄んでゐた。東は因幡、伯耆の山々、西は出雲、石見の諸山、かなたの群山は美作か。山高からぬ地には、五千六百尺も、群を抜いたる山である。中國の山河は、皆その見おろすにまかすかと怪まる。朝の七時、風ふいてやゝ寒い。

少しおりて、ツガの木のもとにて朝の食事をする。更に降つて十町めといふあたりから、降り路をさる。もうあつくなつて來た。その暑さが日と共にますます。それに上り路よりも、降り路は木に縁がうすい。甥はしきりに小言をいふ。咽喉がかわく。

遂に河原にきた。昨日の夕方通つた川の上である。照りつけられて困つたが、その中いさゝかの水を得た。すくひあぐれば、灰のやうに碎けた砂が浮いてゐる。よごまして幾杯か飲む。ほんにつめたい。これで私どもは大山の安山岩とやらの灰を、大山の分身を體中に收めたわけである。降れば水がやゝ多く

なる。そこで顔を洗ふ。やがて右岸に道を得た。林中をゆく事しばらく、奥の院に出る。青年たちがそこで講習をうけてをる。静かな境、尊い建物。降ればこの僧たりし信濃坊源盛の碑が立つてゐる。源盛は長年の弟である。船上ふねの上の役も、その山つゞきで更に深いこの大山寺の後援があつたのだ。山中の記録は南朝の年號をしるしてあるといふ。

十時近くに蓮淨院にかへつた。食事をさして貰つて、私一人、荷背負のおぢいさんをつれて、歸路につく。立つたのは十一時。昨日のまつすぐな道を下れば、雲なき空の下に、美保や、夜見の濱が鮮かにうつし出だされる。この夜見の濱そのものも、日野川が送り出す砂の西へくと流れて、造りいだしたものであらう。その先端の境は、美保と一にならんとしてゐる。さうなつては、今の所、山陰に良港がなくなるゝと、人が争ふ。

私はたゞ急いだ。赤松へよらずに、左へをれる舊道だといふ高原、牧の北隅

を縫うてゆく。海にむかふその眺めも雄大であつた。人は通らで、鳥がおどろきたつ。松小にして蔭をなさねば、きはめて暑い。とつと、一の谷にくんだり、佐陀川をよぎり、往路に合して、干瓢つくる岡成、尾高と、また大山驛へ。往路は馬で四時間かゝるといはれた四里の路を、降りには徒歩三時間で飛ばした。大山は私を見おろして笑つてゐた。山は裾野がゆるく、そして大山寺からは爆烈火口をのぼる事となる。それで大山寺からの路がわりに急なのである。私は早くつきすぎたので、一時間ほど空しくまつて、三時十分發の汽車で鳥取へ。

九日、十日の兩日、私は鳥取にゐた。そして三徳山と、杵築とへゆく計畫を中止して、十一日俄に歸路についた。山陰線をまた晝通るやうにした。石原あたり、屋根瓦に雪どめのあるのを面白く見た。

この線は彼方よりいへば、海岸のおもしろさより、高原を経て、溪谷の美にうつるのである。さるあたり、桑田、綾部と、古人が蠶をかひ、絹をおつたい

そしみの、今に残つてゐるのも、私には嬉しかつた。

さあをなる海の色かな、わが身をば葬りつべき海の色かな。

浅せゆく沼こ人の営みこ

昨日は、よくお歩きでした。空にヒバリの歌はあつても、沼にヨシキリがキヤキヤチンと鳴いてゐても、傾斜地にシドメの紅も薄れて、これといふ趣のない處を、よくあのくらの歩かれたと、心私かに感心してゐたのです。しかし口の重い私は、勝手にすん／＼先へゆきました。アメリカのお二人は、日本の鳥は、英語を話すかなど、Warblerの聲に興じてをられました。鳥は話せても、この日本人は、おし黙つて、お相手を致し得ませんでした。厄介な道連で、どうもお氣の毒に存じます。

手賀沼を渡つたをり、どうしてこんな沼が出来たのでせうと、Sさんがお尋ねでした。私は沼が出来たのでない、土地が現れたのだと、例の不親切な答を

しました。其の道の人は、霞が浦などを海の跡の湖といひ、印旛沼や、手賀沼などを河の跡の湖といひます。それですからSさんにも、川の流が變つたからです、この沼の細長くて、浅いのが、その證據です、利根と並行してゐるでせうと、お答へ申せばよかつたかも知れません。しかし私には利根川流域といふやうな事よりも、漫々たる水の世界、筑波のあたりまで、海と河とがもつと仲よく、ごよめきかはしてゐた古い時代の事が想はれてゐたので、さう答へられなかつたのです。今でも少しその氣味があります。いろ／＼な事をきく甥に、私がいづもあちら向いての返事をしますので、をぢさんは何とやらの教育家でないといはれます。はい／＼其の通りでございます。

然し、私は虚言をいつたつもりでも無いのです。ほんに下總一國をあげて、いや對岸の常陸にしても、地はぐん／＼生長してゆくのです。あの沼のみか、あのあたりは、昔一面の海でしたらう。それから後には、大きな／＼な川々で

したらう。絹川、渡良瀬川、利根川、荒川、それらは一つづつの川といふよりも、もつと縁の濃かなものでしたらう。水また水と入り亂れてゐたでせう。さらに手賀沼は、その姉なる印旛沼と手を握りあつてゐたでせう。北なる牛久沼の水も、そこに通つたでせう。そして霞ヶ浦の水と笑みかはしてゐたでせう。東北の龍ヶ崎、さらに遠い江戸崎、それらは今、人里となつてをるけれど、地名でも知られるやうに、うろくづの住む處であつた。それを水は、出雲朝廷のやうに退くべき時に退いた、次第に國譲りをした。あとに低い地が露れ、沼や澤が昔の姿をどめてをるのでせう。人の方では、秋の洪水に苦しめらるゝと説けど、水の方では、私が年に一度のお里がへりをするのを、陸の人はなせさう邪魔になさるのですかと、不審を立てゝゐるかも知れません。

昨日はお出でなさいませんでした、私のお話し申した布施の辨天様は、不忍、江の島とともに、關東の三辨天と數へられるもの、辨天様の本地は何でお

ありなさらうと、民間では、水と龍とに縁ある美しい方になつてゐます。あすこの傳へにしても、あの邊一帶は沼であつた。それを大同年間、西暦にして八〇六年乃至八〇九年、即ちざつと千百年ほど前に、紅龍出現し、土塊をさゞげて、島をつくつた。島の上には光りがあつた。その光をみとめて里人が島に渡つていつたら、そこに辨天様の像があらせられた。里人は畏こんでそれを祀つた。のち弘法大師が東國においでなされ、その像を御覽なされたら、それは曾つて自ら刻んで、但馬の筒江とやらいふ處にお納めなすつたものであつた。その奇瑞に驚いて、弘仁の末に建てたのが、今のお寺だとか。

今の人の論理で、傳への實否を尋ねようとするのは、無理であります。私は其の傳へが、人の言では物いはぬ地の史を通譯してゐるやうに思ふのです。

斯うして川は流れ、沼は水を湛へてゐます。尤も手賀沼の水は、あなた方の歌つた歌とは違つて、あの通り濁つてゐます。あすこでのバプテスマは、決し

てありがたくありません。あんな水では、水草がくされて、悪い臭がしませう。底だつて一番深い所が三メートル餘に過ぎないのです。流れてゐたものが流れなくなるど、あの沼のやうに浅く、あの水のやうにきたなくなりません。私のいつも流れようとする心持を、あれでお察し下さい。

尤もさういふ浅い沼でも、人間に恩澤を興へますのは、その前の姿なる川の心を忘れぬからであります。

ウナギ、ナマヅ、コエビなど、浅い水に多いものが、あすこの名物です。手賀の渡しで、淡貝養殖の札の立つてゐたのを御覽でしたらう。あれも泥を好むものなのです。ジュンサイも採れます。水草や、沼の土は、田地の肥料になりませう。沼は沼で浅ければ浅いなりに用をつとめます。あれだけの沼でも氣候をおだやかにする效があります。然し私は沼になるのは、いやです。そんなお守役はいやです。私は小さくとも川と流れたいのです。さうでなくば、田澤か、

十和田かのやうな、ふかい陥落湖になりたいのです。

どなたか、あの沼を横ぎるのでなく、縦に下りたいといはれました。以前は、多分縦に上下する舟があつたでせう。人があの邊にをつて、あの水路を利用しない事はありません。すつと後の話ですが、印旛沼には汽船が通つてゐたさうです。それを汽車が出来たので、なくなりました。人の作つたものが、人の作つたものに崩されてゆくのです。そして今は、あの横断が主要な路となりました。

實際、湖とか、沼とかのほとりは、しばし人間の住處の初めであり、部落の出来をめる處であります。昨日乗つたのより、もつと原始的な丸木船なごの造らるゝ地であり、交通の芽ざす處であります。たゞそれは人の世の幼稚園であります。殊にあゝいふ高齢のお婆さんのやうな沼は、さうであります。孫を甘やかしてはくれませんが、どこやら沈滞してゐます。今に消えて田と

なりゆくのですから、仕方がありません。

なにせよ、河のめぐみ、沼のめぐみで、そのほとりに人がよりました。そしてあとから見れば、はかない、その時では、真剣な努力をしました。はじめに往つた子の神様、あれは本地薬師如来として、あんなに金の草鞋が納めてありますけれど、もとは多分石を祀つたものでせう。石神、それほど単純な信仰——私は笑ひません——のあとが、そこ、に在るのです。

岩井の渡には、川施餓鬼の卒塔婆が、水にゆられてゐました。あのやうな末期に近い沼でも、馴れすぎた人を呑む事があります。そして沼の主といふやうな念が生じます。しかし、あのやうな打ちひらいた沼の神様は、山間の深い湖の神様ほど、恐しくは畫かれないやうです。山の湖のやうに犠牲を取つたら、放さぬといふ傳へも起りません。

お茶をふるまつてくれた泉とかのお爺さん、お婆さん、あの人たちの幾代の

祖先が、まづあすこの地を占めたものか存じませんが、あゝいふ土地の人は、沼に接した地をも、水の面をも、容易に人に譲らぬものです。それに舟をあやつる事、水を防ぐ事から、團體運動の利益を教へられてゐます。腕骨も強うございます。他人がその権利を侵さんとすると、大水に堤を破られじとする時のやうに、猛然として起ちます。簑笠つけたあの人たちをなみする事は、出来ません。印旛郡公津村の總代頭宗五郎一人で、あの強訴が出来たのではありません。 「村々徒黨を組み、強訴いたしたる段、公儀をも恐れず、領主をもなへがしろに」したのだと怒り狂ふお役人があつても、湖畔の人たちは、己が水に教へられて一步步々拓いた地を、他人に蹂躪せられるほど、お人よしではありません。宗五郎の物語は、虚實入りみだれて、堀田家のみが悪いやうに畫かれてゐますが、さうではありません。たゞ宗五郎や、六郎兵衛や、半十郎や、重右衛門やの志は、關東平野の民、殊に水に親しんでゐる民たちの志なのです。其の把

握する力の強さが、執拗なりと感せられるほどの念が、水のほとりの民たちの心に、高い響きを傳へるのです。それを會得なさらうとするなら、明治年間の渡良瀬川鑛毒事件、谷中村の人たちと田中正造氏とのした事を御覽なさい。彼も此も同じ心の發露です。水の惠のふかいだけ、俄に之を奪はれる悲哀がつよいのです。地に縛られたるものほど、痛切に自由を求めものはありません。

談がいつもの通り理に落ちました。あすこへいつて筑波の見られなかつたのは、つまらなうございました。きのふ採つたのでは、リンダウが一番さきに萎れてしまひました。キンランも一本は、うな垂れてゐます。ヤマユリはつきませう。アヅマギクは割に元氣がようございます。青年會の花壇へ植ゑると仰つたギンランを、育て、やつて下さい。

(七、五)

銚子の濱

二人は、いま愛宕山の上に立つた。いい所だ、いゝねと一度ならず言つた。さつき銚子の観音堂を出てから、そこの横になびいたイテフに別れてから、二人は高神手たかかみまへの凹地で、燈臺を、海を、左手右手に見ただけで、一通りの田舎道を歩いて來たのだが、こゝに登つて、はじめて廣い景の、前にも、後にも展がつてゐるのを見た。

高さ僅か七十三メートルの地。然し、このあたりのいづこよりも、こゝは高い。犬吠いぬばきは東、長崎鼻は東南、そして屏風が浦の絶壁は、西につらなつてをる。西北には、ゆつたりとした利根の川口、それより瑠璃の色濃きは鹿島灘である。霞が浦方面とおぼしきに、双頭の高みを見いでて、筑波にしては少し低いけど感ふ

をりしも、登り来る翁のあるに質せば、山はそれよりも西へあたれど、今は見えぬといふ。翁は、夕に富士が彼方にあらはれる事やら、よい晴には奥州の金山まで見えるなど聞かせてくれた。三方海の銚子、その大観は、まこと、ここにきはむべきであらう。一晚とまつて朝來るところだねと、私は言つた。紺青の海は、はてなく天につゞいてゐた。小松の下には、コケリンダウが咲いてゐた。

丘を下り、松山を越えるとき、かくれた海があらはれた。砂地には、日盛りなのに、ツキミサウが黄に榮えてゐた。ハマエンドウが豊かな紫にほひ、ハマダイコンが優しく花穂を抜いてゐた。

二人は、漁師たちの網をほした砂濱を縫うて、犬若に出た。そのつき出た岩壁によちのばれば、赭色なした断崖の近きあたりが、さらによく見える。浪は足下の岩の底へと潜つてゆく。廣々とした穏かな下總、その一角に、突と

してこの奇景がある。こゝは、このあたりに罕な古生代の岩とき々およぶ。鹿島灘と九十九里の濱とを兩断し、こゝ銚子の海を荒くしてゐるのも、景を凡ならしめぬのも、下總平野が海なりし幾代の昔から波と争ひ來つたこの岩山の根づよい力であらう。

磯づたひに千が窟をのぞみ、外川ゴガの漁師町に、赤銅色の人たちの網つくろへるに道を問うて、疊岩、長崎鼻のちかくまで遠まはりして、北にむかへば、松の間から、犬吠の白い燈臺が、きつと立つてゐた。

(五、六)

筑波嶺

列車は鳴り轟いて、大利根の鐵橋を越えていつた。昨日氣遣はれたお天氣の名残とて、今日は霽れたれど、目ざす筑波はまだ見えぬ。

取手、藤代、佐貫と過ぎて、左手に牛久沼が現れた。その崎の出たのを、車中の誰やらが、江の島のやうだといふ。牛久は大河の跡をしのばせる沼の中では、優れたる一つであらう。圖を按ずれば、沼のほとりなる幾つかの新田の名が、人のいとなみと沼の退縮とおもはせる。右手は女化の原、老いたる狐が恩に感じて、人の妻となり、子を擧げたといふ、戀ひしくば尋ねきて見よの葛の葉に通ふ話。はてなき野、あるかなきかの小徑、そこにいそしんだ古人のさまが浮びくる。傳は「靈異記」以來のもので、甲地から乙地へと移つたのであ

らうけれど、さういふ寂しい境にゐた古人には、天然と自己以外の生物とが、敵としても、御方としても、強く迫つてゐたのであらう。

原は盡きて、鐵路は私どもを土浦へと導いてゆく。霞が浦の西端、小さいネザーランドのやうな、やゝともすれば水をかぶる地、水戸とは違つに氣風の地、川には大きな四つ手網がかゝり、浦には潮來通ひの小蒸汽船が浮んでゐた。

この日の筑波は、こゝで初めて仰がれた。男體、女體、左から右へと波をうつてゐるのを、Oさんが寫生してをられた。こゝからは此の程より開けた筑波鐵道。車は西北へと、櫻川流域の地を走る。前山のやうに脈を引いた小さい山なみに添うて、本山に近づけば、そこに筑波を名乗る小驛、驛は沼田といふ地にあるのであつた。

車をすて、途を大體、東へとる。登るまゝに、田野が下に美はしく擴がつてゆく。小流こゆるをりにOさんは白墨出して、そばの立樹に「みなな川」と

書く。雨上りの晴とてか、水分さりやらでの暑さに、いづれの人も、額の汗を拭ひつゝ、石の坂路幾めぐりして、結束屋に一と休み。

早晝すまし、荷を軽くし、一日まへに御通知がございますれば、お社の寶物の拜觀が出来ますのにと、主人のいふを聞き流して、男體へ。

一行の中でSさんは健脚、Oさんは周到、足のあがりの一番おそい自分は、あとから老杉の下をゆく。ツクバネウツギ、ミヤマナルコユリ、チゴユリ、ニリンサウ、ヤブケマン、その幾つかを囊に收め、いくつかに目をやつて登るに、みな川の茶店とや、一杯三錢の白玉に、子らは群がつてゐた。

杉の帯たを越えて、ブナ林。かくして此處の樹木に富むのを、人は古くから訝かしんだ。そして國めぐりする御祖みおやの神の話を生んだ。駿河の不二のほとりで往きくれた御祖の神が、不二の神に一夜の宿を求めると、けふは新嘗の祭の忌日、あだし人をお入れ申されぬと、すげないお言を恨みにおぼした御祖の神が、宿か

さぬ其方の山は、寒かれ、冷たかれ、人も登らざれ、食物あらざれと呪はれた。そして筑波においでなされたら、この神は、忌日にもせよ、旅の方に、御宿申さぬ事はありませんぬのおもてなし。喜ばせられた御祖の神は、ここに歌あれ、まどゐあれ、人々來れ、飲食あれと、お祝しなされた。それで不二はさびしく、筑波は賑ふとか。

山の素肌すもに白雪つけて、かつては登り易からざりし不二と、樹々生ひ茂り、登るに易く「をどめをどこのゆきつごひ、かゞふかゞひ」の樂しかりしを筑波とを、とみ、かうみ、關東の人は自然の謎を解かんとしたのだ。

南の方、太平洋をわたりくる風の遮るものなく、水分を此の山に浴びせかくるまゝ、この木々が茂るのだと、は山、繁山のおなじ謎を、今の人は解かんとする。そしてさらに紫に霞む此の山の花崗岩と閃綠岩との關係の謎になやむ。海の水に麓を洗はせてゐた筑波よ、歌垣に若き男女を抱いてゐた筑波よ、

今、鐵路を裾にみちびいて、その體の一部をとるに任せてゐる筑波よ、そなたの本當の姿は、何なのだ。小さい人は、小さい山をも、時の色によつてのみ観てゐるのか。

いつか、樹が小さくなつて、行幸が原に出た。小藤田のかいた額のある依雲亭に、女夫餅たべて、あれが加波山、あれが難臺山と、教へてもらふ。眞壁の町が脚下にある。

男體の頂きに出れば、どつくに登つたSさんは、岩に踞して、何をしてゐたのだといふ。ツ、ジが或は紅なして、あるは牡丹色なして、さいてゐる。老樹とて、花輪は小けれど、おびたゞしく塊つてさく。測候所のあたりの岩間をゆきつ、戻りつするに、風は峯頭を掠めて吹く。

女體の首をかしげた姿を、Oさんはレンズに収めて峯を下りた。薪ほどの太さの杖を鶴鶴が原の近くで採つたSさんは、天狗さまのやうな勢ひのいゝ足取

で、岩の上を女體へとのぼつていつた。

女體のいたゞきは、初夏の日ながらも、さすがに眺に富んでゐた。或は見らるゝかと思つた上野、下野の山は隠れてゐたけれど、東の近い山山も、東北の難臺、吾國、足尾、加波の山山も、それと指される。さうして斯ういふ山山の名が、時の權力に必ずしも唯々として服従しなかつた血の氣の多い人たちの志を談つてゐた。

峯を辭し、高天が原を經、出船、入船の、胎内くゞりのといふ、水に洗ひ出された山骨に手をふれつゝ下山道、「お山みち」の石たつほとり、松とともに自分の影も、レンズに入つて、また筑波の町についた。

かへりの列車に身をよせて、土浦で筑波の山のうすい影に別れ、牛久沼の上覆ふ雲に落日の金色ををしむに、いつか闇が平野を包んでゆく。

筑波の初夏

海軍の飛行機がおりましたか、上つたとか、同車の子たちの騒ぐまゝ、そなたを見てゐた。土浦驛の長い停車時間も過ぎて、私どもは九時五十分筑波驛におり立つた。驛前の自動車は筑波の町まで通ふとか。それをよそに前きた時のやうに、東に向つてゆくと、山の麓に柑橘類の植ゑてあるのに心づく。山を北にした地とて暖かいのであらう。道すがら低地を前にして、寶篋山ほうきやくざんを見る景がやゝよい。筑波の町について、早いけれど中食したゝめ、身軽になつて、皆のあとから、山へかゝる。みな川の茶屋によれば、ツクバネをくれる。山櫻が緑樹の間にあつさり咲いてをる。御幸が原について彼方を見やれど、空晴れねば足尾、加波、雨引などの近山の外は定かならぬ。

十二時半、男體へのぼり測候所のあたりを歩めど、まだツツジの蒼は固い。Tさんと一緒に同じ道を下つて、女體へゆく。叢の下の紫の花を何かと思つたら、カタクリであつた。スミレはかなり多かつた。天の浮橋から下山道の岩を撫しつゝ、高天が原に出で、林下の道を通つて筑波の町に入つた。宿の者の語るをきけば、筑波も裏山とでもいふのに入ると、ツツジなどこれはと思はれる大木もあるとか。ケーブルカー設けて、御幸が原まで、人に地を踏まぬやうにどの計畫が實行せられても、山のいづこかに昔の姿の残れかしと念じながら、降りはずと歩調が早い。

唐澤山

朝からの寒さも、もう忘れてゐた。下野なる田沼の驛を出でて、佐野への街道を横断すると、ほどなく秋山川、澄んだ川瀬が二筋三筋、北から南へと流れてゐる、中にはハエの群が安らかに泳いでゐる。河原には小石の間から、マツヨヒグサの黄花が、晝をなほ咲き残つてをる。近路をとる若い子たちの跡を追ふ心にもならず、私は正直に新道をうねり／＼登りゆく。

金の杖ふるアキノキリンサウ、白き穂を抜くミツバシヨウマ、サラシナシヨウマ、小くとも威張つてをるヲケラの花、星のやうな花瓣を見せるカウヤバウキ。下草は下草として、それ／＼に懐しい。すつきりとした赤松林、闊葉の樹々、日の光が横にさすと、葉のばつと色を改めるのみか、喬木の肌さへ新に光を

放つ。

山骨の削られてゐる處を幾度か廻つて、一茶店に荷をおろし、水の下からぬ茶をも飲み、すすめられるまゝ羊羹をもつまむ。

そこからまた人々と連れだつて、山めぐりする。濁れる大炊の井、高みの神社、いにしへの城址——二の丸、三の丸などいふを、さうかく／＼と聞きおきて、展望よしといはるゝ社務所の傍にたつて、南を望む。つまみあげられたる如き富士、横にのびたる小野寺などの近き丘陵、さては鐘塚、越名の沼、赤麻沼もそれと指され、利根も銀線をひいてゐた。晴れ渡つた朝には、關東平野が廣く廣く望まれる事であらう。

日光の山々が見えさうなものと、一轉して、社の後に近き一地點、やゝ下れる處につけば、樹の間をどほして、彼方にどつしりとした男體、右に眞名子、女によ貌、赤蔭相つらなり、左のは白根か、あらぬか。足尾であらうと思はれる山も

並ぶ、南望の廣げれどもや、凡なるに比して、こゝはキャンパスに收めてもよきさうな景であつた。五萬分の一の地圖に二九〇とある高みにいざなば、さらにこの景よがるべしと、山を知るSさんと語りあひつゝ、引きかへして此度は舊道をくだる。

秋山川のほとりにおりたてば、赤城の山々姿を現し日光はやゝ右手に避けてゐた。落ちついた秋の野山、田の面の穂波、二時間の後、一行の中に病を得るものあらんとも思はず、三時間の後、貨車の脱線に、粕壁の寒く、暗く、燈火なき夜に、さぐり足して線路を辿らんとはもとより思はず、私は静に／＼Sさんとあるいてゐた。

(七、十、廿四)

武蔵の金澤

品川から京濱電車、神奈川から横濱市の電車、それを八幡橋はたですてゝからも、なほ足をしみて、自動車の客となつて進む海添路、杉田の梅林を右にして、ほごなく金澤の小學校、そこに私どもは休ませてもらふ。

古への文教の地、今も地方としては相當な小學校あり、村の子たちは跣で體操をしてゐた。こゝで編じた金澤村誌の一部分を見せてもらふ、永島氏の事となほ知らうとしてゝある。おもふに永島家の事業は、金澤の海の潮面のひいたのに乗じたのであらう。さらば勝景はやゝに衰へて、新田が徐ろに加はりゆいたのであらう。

稱名寺は荒れたまゝのゆかしさがあつた。山門の金剛神は立派であつた。本

堂は荒れてゐた。謠の「六浦」に見える「紅葉せぬかへで」の精が現れいづるには、廢寺の方がうつりがよいのかも知れぬ。それでも池があまりに淺せてゐた。故人の尊さは、かいま見た寶物にも知られる。

朝鮮牛ひく子に道をどうて九覽亭へ。丘の上の亭には、能辯なお上さんが茶を汲んでくれる。ながめはかなり佳い。やさしい景である。大觀といふのは控へておかう。たゞ且に夕にかはる氣象は、さらに美はしい趣きを示すであらう。

三分すぎでの峠道を、明石居士と若き子の上など談りゆく。陰を好む植物生ふる切通し、水茶屋のあとも心をひく。ツ、ジも茂みに見えそめた。

大刀洗ひの井戸、藤綱の邸趾、次第に鎌倉の別莊多くなりゆいて、鶴が岡のわきに私共は出た。居士は土産に月日貝など調へてゐた。(十一、五)

武藏野の盡きんごする地へ

飯能へゆく友に

池袋をはなれてから、あなた方は大體西へ、心もち北へ導かれるのです。豊島の族黨のむかしをお考へなさらうと、練馬の大根をお思ひなさらうと御隨意です。石神井あたりまでの事は、曾て「和かき光」としてかきましたから申しませぬ。保谷を過ぎて所澤、そこは今こそ飛行機の所澤ですけれど、村山がすりの産地、武藏野のむかしにも、交通の要路であつたとみえる。さばれ所澤を古書、時に野老澤とかく。

山寺のさびしさつげよ野老堀

あるひは、山の芋のたぐひなるトコロ (Dioscorea) の生ふる澤の義でないかし

ら。トコロ今はかへりみられず、あたりは他國者のサツマイモが勢をえてをらう。

次の驛は小手指こてさしの名をおうてをる。あなた方は破らん、敗られじとの南北朝のむかしを、そこにおもひ起すであらう。

君が爲世の爲なにかをしからん、すてゝかひある命なりせば、

どは、その大野でつはものはげまされた宗良親王の詠である。

次驛を狭山といへど、狭山はそのあたりなる長い一帯の丘陵をさすのです。

狭山でも霜除をして玉露ぎよろをしたてないではない。たゞしその茶は宇治のどちがつて、二度め三度めとなれば味を失ふ。つよい武藏野の風と霜とが、おだやかな宇治あたりとは違つた香をこの樹に及ぼすのかしら。

豊岡とは市町村制實施以來の名である。扇町屋あしやまぢや、黒須、それは近古の金子の郷、つねは山野にし、矢とる武士が、事あれば征矢にかへて一鞭あてゝ駈けい

でたあとである、金子の十郎家忠の名は、保元、平治のむかしに稻妻とかゞやいた。

武藏野の残れるおもかげを、そのみどりに、しのんでゆけば、秩父連山が見あげられよう。あなた方がもしそのあたりの野にわけいらば、今はイカリサウの群が、きつと林間にあの風雅な花をつけてゐよう。

佛子ぶつしを過ぐれば、もうすぐ飯能はんのう、人口八千、野つきて山に入らんとするところに、その町は建つてゐる。むかしは山間の民が縄や菘をひさいだ市、今は飯能絹から、名栗なぐりの木材を扱ふ。末は入間川となる名栗川がゆるくながれてゐる。名栗、その小天地へあなた方はゆくのではない。あなた方は驛より直徑千六百メートルの天覽山へゆかれるのでせう。そこにはもう春の野の花が數あらう。私はあすこの羅漢様はすかぬ。しかし樹下をとほりすぎての來し方をかへりみるながめはよい。されどたゞ過去のみをかへりみるあなた方でもあるまい。さ

らに下つてまたのぼる彼方がある。もし千三百米突進んで多峯主山の頂、(池のそば古いおくつきのわきからのぼるのです)におたちなされば、さきに我高きにたてりとおもへる天覽山のひく、彼方にあるをみるであらう。天覽山は高距百九十四メートル、多峯主は二百七十一メートル、多峯主のながめはそれだけ彼を凌いでをる。曇らずば近山も遠山も仰がれる。歸路は前路ならずとも、南してほごなく名栗川のほとりのひろい、よい路へ出られる。もし飯能から北すれば中山、高麗峠、高麗本郷、即ち千二百年ほごまへに、靈龜三年高麗人千七百七十九人來りて土地をひらきしあどである。

さらに北は(そこへあなた方はゆくひまはない)山根村となり、毛呂となり、越生となる。そこが私に三年間ある夢をみせた土地である。

なほ添へていふ。あなた方の明日すぐる地は、いづれも地史のいはゆる第四紀、されど低地は新層、高地は古層、おのづからなる相違があらう。そして今

あの邊の山野に文をなしてをる花を、私のおもひだけからあげれば、木には、ウツギのいろく、ツ、ジのいろく、クサボケの紅など、草では、黄なるキンバウゲ、白いニリンサウ、それからナルユリとアマドコロとハウチヤクサウとは、いづれも緑の鈴をふつてゐよう。キンラン、ギンランは名の如く黄金、白金に、エビネ、キエビネなどの蘭は穂を抜いてゐよう。そしてそれをおほふやうに大樹、小樹は、たゞみどりとのみでは寫せぬ色を浮かせてゐよう。それにテフはモンシロテフも、アゲハも、まだ成蟲となつたばかりで、翼の色あざやかに、あやしい飛びやうをしてゐよう。

(五、五)

多摩川の流

薄曇つてゐましたけれど、羽村^{はねむら}あたりからは左の車窓に山が見えました。盛りあがつた波頭のやうなのを、傍のおぢいさんに聞いたら、大嶽山だと教へてくれました。

日向和^{ひなたわ}田^{わだ}でおりにて、私どもが歩いた道、あれは甲州裏路といつたものだからです。小佛峠を越しての本道より二里ほど近いとて、あの道を取る者も、多かつたさうです。街道を少しゆくと、すぐ多摩の川瀬が見えました。あの川の美しさは、もつと遙かに奥にあると聞いてゐますが、さすがに、あのあたりでも目につきます。水は、我が立つ所より、ずつと下に白泡たて、うねり／＼流れてゐました。

シヤガの咲いてゐた小溪を越えてから、右手に社を見ました。石神^{いしのかみ}祠^{ひら}ときさまれた額が、私の心をひきました。さういふブリミチーブの信仰をすら、私は懐しむ時もあるのです。

二俣^{ふたまた}尾^おの海禪寺は、高みにあるので、山門からの眺めは、やゝ展けて居ました。眼に入る近山は、青、緑、黄、いろ／＼の若葉衣をつけてゐました。お寺は曹洞宗、五代めとかの住僧が三田綱秀に計つて、再興したのださうです。三田といふのは、今でも、あの邊の地名になつてゐますが、もとは、もつと廣く、青梅あたり五十五ヶ村の總稱であつたといふ説もあります。とにかく、その領主であつた三田彈正少弼綱秀は上杉輝虎の武を慕うて、小田原の北條に抗しました。それで北條の勢威が關八州に盛んなるにつれて、綱秀もつひに亡されたのです。あんな所と思ひますけれど、あれで、西は甲州路、北は飯能、川越などへ出られるのですから、城を構へもし、圍みもしたのでせう。人は昔から

戦ふものと見えます。十七代も續いたといふ豪族が没落した時には、哀しい物語もありましたらう。お寺の羅漢さんは、たゞ黙りこんでゐました。

軍畑のお茶屋は、ありがたくありませんでした。お湯はぬるく、蠅は関の聲をあげてゐました。川原で中食した私たちに注いだ雨量も、やゝ多すぎました。材木をこしらへてゐる人たちの後の崖には、卯の花が俯向いてゐました。水車がやゝ離れて設けられてありました。

雨ふれば蠅の宿にもかへり来る人おもしろし長き袂の

こんな歌は、いつた人でなければ、何の事だか解りますまい。

お日様の光があらはれそめてから、舟で渡つた多摩川、渡し守の家は晝になつても、晝の家に身を置くには修業が入りさうでした。渡頭の樹かげは、水分を宿して、下草を養つてゐました。往來に出て、東南へと道をどれば、柚木、上分、中分、よろしきほどの家々、所々のお社お寺、花過ぎての梅、福壽草、

そこの人々の生活を見せてゐました。

また川において、神代萬年橋のあとなる渡のあたりは、静かな思のする所でした。断崖にツ、ジも咲いてゐました。シバヤナギ(?)も煙つてゐました。岩は、古き、新しき姿を見せてゐました。水上の山も、すこしは此方を覗くやうにしてゐました。

かへりの汽車で、何人か買った鐘乳石は、いゝ肌をしてゐました。鐘乳洞は、あの村の北にあるといふ話です。古生代からの岩、その岩山を穿つ水、その岩山をくだく人、水と人どが纏れあつて、地の表をかへんとしてゐます。

それより私は、あの青梅あたりの水の事をおもつてゐました。あすこで多摩川は、山に別れます。「山に在りては泉水清く、山を出でゝは泉水濁れり」下流の六郷は、あの通りです。守られてのみ、あの水は清く、東京市の地下に入りきたる。されど私たちは、さう守られるのを望んで居ない。定められた水路を、

暗い管のなかを通されるに過ぎずば、清きも己の力でない。澄んだまゝに流れたい私は、山に離れる水の姿をいとほしむ。よしや離れても、初心を失はぬやうにと、私は水を見、また自分を見てゐました。

(六、五)

武蔵の御嶽山

連なる山々の見える武蔵野も、今日は空際に薄色絹を張つてをる。少し雨催ひよと思つてゐる中に、野は盡きて、山あひの田舎家の屋根が、しつとり濡うてゐた、それでも日向和田に下りる頃には雨も止んだ。

朝の九時近く、〇さんと二人、人力車にのつて川添道を走らせる。多摩川が青い。曇つてゐるので、岩も、水も、やゝ黒みが勝つてゐた。「玉川の水はも青し、岩くろし……」など、口吟んでをるうちに、想はあらぬ方へと移る。大嶽山へゆかれようかと聞くと、けふはお止しなさいましたと、車夫は答へる。さう言はれるほど、山には霧が捲いてゐた。

見覚えのある石神の社が、立派に普請中なのをみると、これは、二俣尾まで

延長する鐵路に所を譲つて、會社に普請をさせてゐるのらしい。出雲の國譲りは、昔から絶えぬのであらう。

川に枕のせんだ水茶屋の多いのに、多摩川くだす筏師の昔の生活を知りたく、車夫に以前の事をきいても、川崎の脂粉の世界が、それで賑うてゐた事ぐらゐり答へない。私はこの街道を甲州路へ、また秩父路へいつた人と、此の水路を下つた人によつて、川添の家々に、どのやうな繪が畫かれたか、知りたかつたのだ。今は川邊の製材場に、西洋の鋸が音を立て、廻つてゐる。細い丸太は皮を剥れてゐた。高みに學校があつたり、村役場があつたり、「澤井郵便局」の札がかゝつたりしてゐた。氷川へゆく七號の乗合馬車は、中形の浴衣をきたおかみさん一人を乗せたまゝ、私たちを追ひ越していつた。斯ういふ繪も誰か寫しておいてもらひたい。

横尾で砂利を敷いたばかりの御嶽道へはひる。新高橋といふ廣からぬ釣橋が

出來てゐる。以前の橋より少し下手に懸つてゐる。ごこの旅であつたらう、土地の人から、「今度サスビンシャンといふ橋がかゝります」と言はれた事を想ひ出す。その「サスビンシャン」の興だけ残つて、所も、時も、うかんで來ない。橋を渡つてからは、川の右岸をゆく。

中野であらう。「御嶽山里一里六町」とある杭のもとから、左へ折れ、少し登ると、車屋は「こゝでございませう、休んでお登りなさいませう」と梶棒をおろす。十時十五分。

私たち二人は、背囊をせおうて登る。禊川みそぎ小けれど洗ひ出された大岩もあつた。澤を埋めるやうに紫のタマアヂサキが咲き、御師の家のほとりに、ワサビが奇麗に作つてある。その瀧本を出はづれる所に、大銀杏が立つてゐた。それにそつて茶屋があり、おかみさんが繭を煮て絲をとつてゐる。小さい瀧がさらさらと落ちてゐる。道の正面には巨木がそゝりたつてゐる。

天をさす喬木の世界。神坂のしめつた路に、廣いトチの葉がやゝ枯らびて落ちてゐたり、コトヂサウが叢に黄い冠をつけてゐたりする。

半分もゆくか、ゆかぬに、私の足が鈍くなる。Oさんがいたはつて、溪を瞰下すやうな所に休んで下さる。そこにはササクサか何か靡いてゐて、アシナガクモが細い長い足をあげてかけてゆく。

木を伐つた跡もあり、杉の植林も見える。處々に谷が開けて、曇り日ながら多少の景が現れる。Oさんの肩から寫真機の取り下される時もあった。

むかうから、中年の逞ましい髯男が、ゆつたりと下りてくる。すれちがひに見ると、腰の利鎌はいかにもよく切れさうだつた。その男の姿勢に感心しながら、私はせいゝ息を切らしてゆく。Oさんが遠くに人家を見つけた。御師の家である。遂にそこへも着いた。坂の腰掛に荷をおろして、十抱もありさうな大樹をあふぎ、谷を見おろす。御師の町を右折し、左折する。

老杉のもと、石階をも幾級か上つた。霧の御坂とやらをも通つた。十二時。神々しい社の横手の廣場の石に腰打ちかけて、二人は食事をしたゝめる。霧は溪より舞ひのぼる。地から樹の幹へ、幹から梢へと、霧が傳はつてゆく。それが溪を深く、樹を高くさせる。老樹は語らずして物を言ふ。鳥の聲はまれにのみ洩れてくる。

社務所に引きかへして、Oさんは繪葉書を買ふ。そばで粗末な案内書やうのものを開いてゐるうちに、畠山重忠の甲冑と太刀との寶物になつてをるどの記事に目が觸れると、物の本の記憶が少しづつ生きかへつてくる。重忠の館は大里郡にあつたけれど、こゝも所領の内とやら。多摩川のおくの御嶽から、荒川べりの畠山まで、地圖の上での直径十里もあらう。武蔵武士分布圖だけでは、よく分らぬけれど、秩父權守、畠山庄司の家は、土豪の中でも勝れたものであつたらう。そこから彼の如き時代に適はしい快男兒が生れたのだ。彼の鎧を奉

130
831
9
10
1130
12
1

納したのが、果して建久二年だとすれば、それは彼の廿八の時である。彼が平家の爲の初陣は十七歳、頼朝についたのもその年である。宇治川の功名は廿歳、鵜越の逆落しも同じ年。壇の浦は廿二歳、奥州征伐が廿六歳。廿八歳とは、もう干戈の收まつた年である。あとは鎌倉の長者としての彼を見る。そして都筑郡二俣川で討死しのが四十二歳。私どものいづれよりも、彼は若かつたのだ。私が功名宗の信徒なら、もつと感慨が深いかも知れぬ。然し、年の事は家に歸つてからの想である。私は戦をはつてこゝに武具を納めた彼、こゝの老杉を仰いだ彼、武藏の山野に狩くらしした彼——従つて鵜越は何でもなかつたのだ——本所といふ事が異常の魅力をもつて、人々の上にはたらいだ時代だけをおもつてゐた。

大嶽山へゆくのは半日仕事ですと、社務所ではかれて、奥の社のうしろから、奥の院へと、やゝ急な細い徑をおりる。タマガハホトトギスでもあらうか、紫

點のある花が所々にさいてゐた。

おりきると本道に合するので、よい路になる。奥の院から歸つてきた三人づれの若い人たちにあふ。のぼりになると、また私がおくれ勝ちになる。もう何メートルなど、Oさんがそれとなく勵まして下さる。雨がはらく落ちかゝる。少しの岩角を越えるとき、ゴエフツツジらしいのがある。もう頂きに近いのだ。すでにして小社、そのうしろの高みへとまはる。

峯頭に少し平な地がある。こゝを男具那の峯といふとか。甲籠山も神の山と尊けれど、男具那の峯の、若子をおもはせるのは優しい。倭男具那は後も榮えよ。

一時半になつてゐた。そろ／＼かへる。こゝはOさんに取つて、おもひ出多い山である。廿年まへ、四人の青年をつれて、大嶽へゆかうとしたが、引きかへした尾根づたひ、闇に路を失ひ、マッチなく、食なき秋の一夜、Oさんなれ

ばこそ、いくさ話に青年をひきたたせて、再び日の光を仰がせたのであらう。次の朝、養澤とやらの一つ家を見いでて、老翁と少女との情に食を得た事、自分たちを捜すとて、夜を籠めて、そこへも人のきた話、さつき社務所で質せば、袴つけた人も覚えてゐた。鳥居のもとへ歸つてから、一行の泊つた御師の家を尋ねると、静な山の人たちは、以前の事を忘れてゐない。須崎さんといふその主人は、よい茶を出して私どもの渴をどめてくれた。Oさんを力づけた一つ家の翁は死に、少女は嫁ぎ、家はあれど他の人すむと、談つてきかせる。

二十年、事は過ぎてゆかう。でも何かゞ誰かに残つてゆく。Oさんの心にも、一緒についていつた人たちの心にも、さては燈火を照して山をめぐつた人の心にも、たゞそれがそれ／＼に違つてゐよう。

あの頃のOさんは重忠の甲冑を納めた年に近かつであらう。南島征討の軍に従うたOさんは、そこで人ばかりでなく、自然とも戦つた。「學者なるO中尉」

さうした國民新聞の戦時通信を私は川越あたりで讀んだ。その南島での双眼鏡をOさんは、その時この山の茂みに記念として收めるやうになつたとやら。

責任感の強い所から、Oさんは人一倍苦しみもしたであらう。黒須の人の講壇での言に憤つたとかいふのも、その責任感がさせたのであらう。その時例のやうに笑を含んでOさんを慰めたH先生。事と人とは過ぎて、事と人とは残る。今のOさんにこゝは詩であらう。そして歸りにまた拂澤ほつきはで、まへの三人づれにあつた時、「早うござんしたな、若い者は適ひません」と、私どもが年寄扱ひにされたのを、Oさんは何ときいたらう。

須崎さんにも、山傳に吉野村へ出る道を尋ねたら、ひらいたのちの手入届かず、それに草がはきてゐて、今はいけませんと答へられた。それでいかめしい家を辭してからも、もと来た路をとつた。かへりは、さすがに樂である。杉のもとなる中の茶屋、はた瀧の茶屋拂澤ちかくの玉川を、Oさんはレンズに收め

た。玉川は随所でよい景をみせてくれた。岩を噛む水、川瀬、川隈、ともにおもしろい。海禪寺の石階に一休みしてゆる／＼小雨の中をゆく。ほごもなく日向和田、雨は強くなつて来た。

かへりの列車には、豪雨車窓をうち、稻妻が野を照してゐた。(八、九)

秩父の話

花火の音がしきりにします。お向ではいつもの謠がはじまりました。家の者は電車を見にゆきました。私は電燈の下で、きのふ秩父からとつて来た紅簾片こうれんぺん岩いんといふのをいちつてゐます。しかしこの太古の石は、沈黙家です。もつと修行でもなさいといった風にすましてゐます。

A、B、C、さん。ほんに昨日はよい日でした。あなた方が二重橋のそとに立つておいでなさる頃、私はいつもの一人で、上野をもものすきに立ちました。わかりもせぬ地質學の本が一二冊、背囊にはひつてゐました。汽車は御承知のあの丘陵を左にし、ひくい地を右にしてゆくのです。こゝの低い地は新しく、こゝの高い地はやゝ古いのださうです。何でもないあの線路、それが私たちの

通つてゐる道でないのでせうか。私たちは舊きにつき、また新しきについてゐます。

私の眼は時に本の上に落ち、時に野もせにむかひます。地質學といふのは、地球の過去、現在、未來を教へるものと承つてゐます。水の力、熱の力、それ／＼あとを岩にとどめてをるのでせうか、人間が一生の力、いや何代かの力を盡して、僅かに近づき得るのは、一時のまことに過ぎないらしい。地は移つてやまず、動いて止まず。山は生じ、山は崩れ、海は進みつ、退きつします。私たちの心の動きやすいのは、私たちの生の崩えては消ゆるのは、地といふ母の氣質をうけついでゐるのでせうか。

裸木が何本も／＼枝を擴げてゐました。農家の男たちは、黒い土をおこしかへし、女は色だすきをして何か播いてゐました。煙突の煙は、お天氣を告げがほに東へ／＼と靡いてゐました。秋の光は空にも、野にもみち／＼てゐるの

です。

汽車は荒川を越えました。私はこの水の流れきた方へゆかうとするのです。その水源の山々は、薄い帳の中にかくれてゐました。樹々は農家を守るやうにとりまいてゐました。南を受けた庭には、黄菊がかたまつて咲いてゐました。葉の疎になつた柿の木には、實が赤らんでゐました。列車は時に林に入ります。松の林は、雑木林と趣きをしてゐました。潤葉の樹はほんのり黄ばんでゐるのもありました。吹上ふきあげ近くなつて左手の車窓から白いものが仰がれました。不二、雪の不二なのです。赤城は右手に延びてゐました。

熊谷で秩父鐵道にのりかへしましたが、一向出るやうすがありません。汽車の時間が變つたのです。しよう事なさの一時間あまりを、來週あなた方の來られる時の手配につかつたり、熊谷寺にいつたりしました。そして、も一度あの小さい車に乗りましたら、今度は多勢の乗客、やつと席を得ただけ、物をおもふ餘

裕も、あたりを見る隙もありませんでした。或はもう思ふのも、見るのも、いやになつたかも知れません。手帳は白いまゝに残つてゐます。

なにせよ、あの櫻の堤について汽車はしばらくゆきました。

小驛あり、砂利はこぶ車あり、林あり、小流あり、それをいくつか越した所が寄居です。以前、私をのせて山のあなたの越生へいつた馬車の馬丁は、よく寄居の話をしてゐましに。鉢形の城、象が鼻、耳にだけは馴れてゐます。その城を守つた人たちの心根を私は知りませんけれど。

波久禮になつてから、荒川は上流らしい風情をあらはしました。水は濁つてゐても、兩岸の秩父青石は、おの／＼の姿をしてゐました。斯ういふ所をA、B、C、さんたちがGorgeといふのだと思ひました。景は大きくありませんが、やや面白くなつてゆきます。本野上で降りるのは、前の時間ちがひから止しました。しかし寶登山で、ごや／＼とおりる洒落た人たちを見ると、調子があは

なさうなので、私は親鼻まで乗りこしてしまひました。

そこで降りたのは、二三人に過ぎなかつたでせう。私は一人で皆野の方から親鼻橋へ出ました。さながら広いとこへでも出たやうな心地で。大正三年何月とか銘うつた立派な橋が架つてゐました。橋の袂に徑を求めて、私は橋の下にくだりました。なるほど大きな紅みがかつた岩、書物には紅簾片岩とかいてあります。紅簾石はイタリーの山地にあつても、紅簾片岩は日本固有の基性岩です。荒川の上へときた私は、いつか斯うして地球の上で最も古い岩の一つに、しばしの身を乗せてゐるのです。紫が、つたこの石は、平たくはげます。これは紅簾石、石英、絹雲母などから成つてをるのだといふ事です。大きい岩の上をのぼりつ、下りつしてをる中に、鍋穴が見つかりました。なるほど鍋穴。だと私は、つぶやきました。一尺ばかりの穴には、水が溜つて、クモが上に巢をはつてゐました。小さい石もはひつてゐました。私は水が渦をまいて、この岩の

上をいつた時のさまを、想像に忍がかうとしました。それほどあたりは静かでした。橋の上をとほる人もありませんでした。岩ばしる水、落ちたぎつ。くぼみに落ちて、渦に巻かれる石もまるくなれば、それを入れた窪みも斯うまるくなる。まるくなるのは、あなたの方がお上手な筈、なせ丸くなつたと歴史を無にした事を、私はいひません。たゞ私は、まるくなつた跡を見たいといふだけの人間です。(大きいケツトルを見つけたのは、二度めにいつた時でした。埋められてゐると、ケツトルでも、知られずすぎると見えます。)

橋を渡り金崎の修文堂といふ本屋に荷物をあづけて、十二天山といふ小丘に登りました。南に秩父の盆地が見えます。やゝ高い山々が、ひくい山をとりまいてゐます。すぐまへのは和銅の昔にゆかりの箕山、やゝむかうに鉢形なした武甲、それから三峯と、左から右へのびてゐました。荒川は山の裾をまいて白く走つてゐました。新世界のあけぼの、地もあれば、太古界の山もうかゞはれる。

青鮫のたぐひの遊いだところも其處、ホタテガヒなどを産した海のあともついで、今日いふ意味の生命はあらはれなかつたまへのく岩も、そこにある。日本の Lyell は、この地から出づべきではないか。ありし日に庄司重忠を生んだ秩父、今の世に秩父絹を出す秩父、こゝに露出せる岩の上に遊ぶ子を、こゝに聳ゆる山に葺かる子をはぐくんで、十九世紀にライエルが地を照したやうな業を、この世紀にさせてもらひたい。さすれば日本の地質學の確立するといふ位の事ではない。一の波は他の波を生む、ライエルのあとにはデアウインが出よう。人の生命の上にもまた然あれど、私は祈ります。

足下には、センブリやら、リンダウやらが咲きはこつてゐました。私どもの祖先は、はやくから斯ういふ草の薬になるのを知つてゐました。そして良薬口に苦しといつてゐました。千度ふり出して苦しいといふその名にしても、當薬とか、クスリグサとかいふ名にしても、リンダウをエヤミグサ、オコリオトシな

どいふにしても、古人が生命を守つてきた面影がうかがはれます。私は白い野菊を手折つて、あかるい其の山をおりました。古墳といふのをのぞいて、國神の停車場の驛員に虎石の所在をきいたら、わざ／＼川原まで案内してくれました。そして學問の方の名は何ですかと問はれて困りました。神保博士の本には、黒雲母片岩、緑泥角閃岩などかいてありますが、それはちつとも私の知慧でないのです。

水際を少しはなれた砂地には、カハラトクサがはえておりました。小徑をわけ、もとの鐵道線路へ出て心づけば、ツボンに野の草の實が、もじずりまがひについてゐる。草は斯うして新しい所へ、その子をおくり出さうとします。タウコギの刺のある實は、一つ一つつてゆけば、まだよいけれど、メナモミは、とる指先にべつとりと粘りつくのでいやでした。それでも彼らは、私をつかつて新しい所におちついたのでせう。

とう／＼長瀨へ来ました。青い黒い岩の上——これも古い石、黒絹雲母片岩、緑泥角閃岩などさうです——人の居ない茶亭がありました。壁には落書無用と大きく落書がしてありました。私は静な上流の方へいつたのです。何丁にもわたつてゐる岩のすきまには、紅葉したシバヤナギが澤山やごつておりました。濁つた水が静に流れてゐます。對岸は高い斷崖です。そこの樹々が少しは色づいてゐました。小い瀧もかかつてゐました。人の居る方には掛茶屋も幾軒かあり、舟もつないでありました。そこはあなた方が御自身で御覧なさいまし。妨ぐるものさへなくば、よさうなところですよ。

寶登山へもお社まではゆきました。背後の山へのぼるのでなくば何も見えないうやうです。三時半の汽車にのらうと、そのまゝかへつて来ました。停車場には華やかな群がゐました。長い尾をしたヤマドリ的美丽なすがら、遊獵家の肩から下つてゐました。ヒョドリは黒ずんだまゝ、だらりとなつてゐました。

それよりも私の乗つた車の内には、金縁眼鏡のアスピリンなどいふ事をよくいふ男女の一行が、はしやいてゐました。いろ／＼の俗謡がうたはれました。人の世の春をたのしむといふのか。そこに酔へるものなら、酔へる方の邪魔をする氣もない私は、車窓から峡谷のさまをながめてゐました。秋のくれやすい日は、その中に何もかも埋めてしまひました。

さあ今度は、あなた方から聞く番です。

(五、十二)

岩 殿 山

晝の十二時ごろ、大月につくと、甥が迎へに來てゐた。一應、町の方にゆき、さて後、畑の中を突ききつて、桂川の川べにおりる。川床深く、岩露れて、橋のあたり趣がある。橋を渡つて登る。畑倉へ越ゆる道とて、さまで狭くない。されど深くゑぐれた桂川へおりて、また上る事とて、地圖の上で見るより、道の長い心地がする。左手にも絶壁が見える。畑倉への鞍部、ツク坂峠に來て、一休みする。そこから右手の狭い山路に折れて、岩殿へ登りゆく。距離も短いし、低い山だしと思つて、靴ばきで來たら小石があるので、つる／＼と滑べる。つひに岩間を登ると、曇り日ながら雪の不二が美しく仰がれる。下には桂川が紆つてをる。甥は地圖を案じて、右手の高きを鶴が鳥屋であらうなどいふ。山の平

をそちこち歩き、勝沼からのブドウを食べなどする。秋の日の暮れ易き上、午後四時発の列車におくれまいと、猿橋へも廻らず、もと來し道をおりた。大月の驛には、紅葉を携へた人たちが何人か待ち合せてゐた。(十一、十三)

甲斐路

昇仙峽

新宿で驛員の示すまゝに乗つた列車は、便りよいのでなかつた。武蔵大野を眞直に走るいつもの線、窓の枠に遠山收めて繪をなすほどの晴ならねど、車中は賑はしい。

多摩川、淺川、それを平野の末に見て、いつか桂川のいかにも溪流らしい姿にひかれてゆく。山ふところには、紫のヨメナ、うすくれなるのナデシコ、それから黄色なキリンサウ、堤にはツキミサウ、河原にはハ、コ。

山も、溪も、野よりは遙に潤うてゐた。山の巔を雲が徂徠する。徂徠といへば物翁が夕闇に見た猿橋を、〇さんは朝の光で西の邦人に示してゐた。岩殿は

史實を離れても人をひく。笹子の暗きをのがれて、列車が高みに出ると、峻嶺が彼方に現はれる。寫して來た山の姿に照りあはせて、それか、これかと考へる。

いつか葡萄賣る聲、あの籠に甲斐の秋は盛られてあるのかしら。私は石和あたりで、中食をしてしまつた。外套を友に頼んだりした。私どもは甲斐の首府におりた。そして十二時十分まへに、私は少數の若い人たちと少しく西にゆき、轉じて北へと向つた。營から出てきた兵士たちが私どもを過ぎていつた。

時がないとおもふ念が私を急がせた。ごろた石の道をまがり／＼私は進んだ。日が照つてゐた。冬服があつかつた。和田峠にさしかゝる松の根方で一休み、西の國人がおひついた。甲府の街をみかへりながらまた進む。山下の道より峠道は遙によかつた。たゞ暑い。息がきれる。それに聊かの荷も邪魔になつた。こんなでは兵隊さんはつとまるまい。

頂上の茶屋にも休まず、心持下ると、左手に雪のやうに山肌の白い小山が見えて美しい。白山といふのも自おのづからであらう。御影石をそのあたりから切り出してゐる男もあつた。

道しるべのさすまゝに、私どもは、左へ、右へと、田の間を、丘のほとりを縫うていつた。地圖に河方とある地點であらう。ツ、ジ生ふる岡に上つて一休みするころ、私はもう一人になつてゐた。岡を下つて少しゆくと小流、それをよこぎつて、しばしすると天神平の茶屋、こゝが昇仙峽の門戸であらう。

私は荒川のほとりに出たのだ。歩をあぐるごとに、景は私の目を悦ばせた。紅葉には少し早かつたけれど、群れ立つ松も、それを宿してゐる御影の岩も、岩間を滑る水もよかつた。それは信濃の差さし切新道をおもはせて、それとも違ふ。何岩、何岩といふ名はさておいて、私はその山を、水を美はしとおもつた。そしてそこを開いた猪狩の農夫を尊んだ。

山の聊かひらいた地に水田がある。高く崖にのぞんで組みあげた小學校の校舎がある。茶店がある。宿がある。そして突兀たる危峰がそりたつてゐる。それが覺圓峯なのだ。もう三時十分過ぎになつてゐる。三時まで進まうといふ豫定を越してゐるので、私は引きかへした、金峰は此の奥よと見えぬものを見んごしながら。

まへに私におひついたIさんは、もうさきへいつてしまつた。Aさんたちが私のおつきあひに、そろ／＼歩いてくれる。和田峠近くでもう暗くなつた。薄曇れる空に、月は細い。甲府にはひつてからも、柳町までは徒らに長かつた。佐渡幸についたのは、七時近くであつたらう。

富士川下り

鯉澤ゆきの馬車に乗ると、朝、太田町の公園にゆけば、武田菱の紋うつたゑは、一蓮寺か。石佛の坐像の頭といはず、膝といはず、味噌をぬりて、洗米

も少しさゞげあるを、何ぞと問へば、味噌地藏と人は答へた。

曇り日の甲府盆地を馬車はゆく。ひゞいほこりだ。Yさんが湖底をあるいてゐるのだものといふ。うつすらと見えるのは八ヶ嶽か。釜無川をわたり、駿州往還をひた走りに走つて、青柳から鯉澤へ。

富士川くだるとて乗りこんでも、舟は容易に出なかつた。雨もよひの陰鬱な空、ふらぬまにと食事をする。昔のは知らず、今のは舟も川舟として小からず。雨後ならねばか、流もこのあたりはさまで急ならず。波木井^{はぎり}までに一ヶ處客をおろして瀬を下つただけ、飛沫もさう被るのでもない。船を操るもの三人、その中の一人櫓をこぐは仙人の如きおももち、船頭に使はれをるが、足には足半^{あしなま}(指さきだけの草履)をはいてゐた。かゝる人を支那の畫家は畫いたのかと、私はそのさまを見まもつてゐた。

「兩岸の猿聲啼いて住らす。輕舟已に過ぐ萬重の山」と、人はよく引いたけれ

ど、今の私どもにはさる念は少い。私には角倉親子の事がおもはれたり、舟人の生活がおもはれたりした。

波のさどめき、この日の富士川くだりを私はさう感じた。雲中にはの見ゆる山を、富士だの、さうでないのと、人々は言ひあうてゐた。カルタに身を入れてゐる群もあつた。さういふ人は自然よりも紙の文明の方がよいのであらう。

早川と合するあたり、水の色は彼と此と異なり、水の勢も加りゆく。屏風岩はさすがに人の目につく。ピラミッド形なせる山は、巖積いわだをつけたまゝ、直ちに川に下つてゐた。

川の水は田へみちびかれてゐた。川を上る舟も、ひかれていつた。でも私は現心うつしこころもなくしてゐた。舟は第三紀層とやらの地を流れていつた。

舟は波木井についた。船頭は私どもに明日大野から下へ乗つて貰ひたさうな事を言つて別れた。富士川舟の少くなつた事がおもはれる。景は下流の方がよ

いのであらうか。

小雨の中を私どもは、きれいな波木井川にそうて、身延みよのにはひつた。玉屋とかいふのに宿る。夕となり、夜となつて、雨は強くなつた。若い人たちの陽気な、しかし私には雑音にきこえる歌聲もあつた。私の心は楽しまなかつた。笑はしば／＼なやみである。

身延から

夜來の雨の晴れさうもないので、奥の院へもゆかず、Oさんの跡について、草庵あと、祖師堂、高座石と、少しばかり歩む。雲は山を掠め、露は流を吐く。かゝる地に英雄僧を招いた豪族と、かの僧との友情は美しかつたであらう。杉木立の茂れるには、日辰上人とやらの力も多い事であらう、

馬車を新に開けた身延驛へと走らす。道は危く、車は揺れる。雨もますます強く。不二川わたすしばしのまに、一行はすつかり濡れる。宿でよこした中食

の口にあはぬのを、茶店で半ば食して、晝すぐるころ身延鐵道の列車に身をゆだねた。

線路は概して富士川の左岸にそうてゐる。雨ならば美しさの見らるべきを、閉ざせる窓のガラスの曇りは、時にせまり、時にゆるやかなる川をそれと見するに過ぎなかつた。その甲駿の境には勝地も少からずときいてゐたれど、その日はそれと仰がんよしもなかつた。

川を離れて大宮に近づけば、雨やゝ收まりて、不二の根の姿は薄く、愛鷹は濃く、空に浮んでゐた。

(九、十、十九、廿、廿一)

霧積川のもごへ

峠の朝霧晴れやらぬに、道に三羽ほど出てゐたのは、カケスか知らん、私の妻に溪へ飛びおりてしまつた。峠町から小學校がよひの女の子が一人、女の先生らしいのが一人、相ついて下りて来る。一里を隔てた離山の學校へゆくのであらう。碓氷の峠町についたのが八時二十分、前崎傳次郎といふ案内者を頼んで霧積へ。

子持山みゆる尾根のあたり、坂本みちを離れて、左へウスイキサウの群がる中に入る。降り気味。喬木帯あり、丸木橋あり、砂防工事の小舎もありて一瀑、それは瀧の上流に當つて、雌瀧より少し小さかつた。下流をわたつて、またのぼると雄瀧が下に見える。あたりの樹木を伐つたとやら、何年かまへに見たの

より、景がそこなはれてゐた。

みちめぐりて高みに出づるごとに、すぐ目につくは妙義。うす曇れる空は、榛名や、妙義を遠い山とし、筑波を雲に藏めて、いとかすか。

ナツツバキの白花の地に散れるを弔ひ、むらがり咲くハクサンヨミナヘシの黄花を見やり、澤を下り、山をのぼる。たどへば五指の開ける間を、蟻などの登りつ降りつするやうに。五指の間は、澤、水あるもあり、水なきもあり、澤への途の崩れおちて絶えなんとするは、五六箇所止まらぬ。一の字山の下を、鼻曲山の下を、斯うして私は滑り落ちた。十時廿五分元霧積。

霧積川の河床、こゝは少しくひろまりて、石をあらはす。今は材木一本あるでなければ、浴室の流されぬ前は、家幾棟か、こゝに並び、軽井澤の外国人たち食事もたせて日に幾組も来たやら。その頃は、途も斯ほどに荒れてゐなかつたらう。今はこゝから十丁ほども奥、入の湯にのみ人は住む。山懐、そこ

についたのは十一時近かつた。

上野國碓氷郡坂本町金湯館とか。風を防ぎたる溪紅葉の秋の美しき思はれる。順路は遠くとも坂本からであらう。湯はぬるけれど澄明、膚いと白く見ゆ。村長をしてゐたとかいふ白髪の老爺と、病める老媪と、十二三ほどなる少女と、血氣の若者と、家の人としてはそれだけらしい。若者は川より水を汲み、少女は茶を旅人にすゝめる。浴客、男一人、幼児を抱ける母一人、かゝる處に病む人いかに。

時はやけれど、これよりのちしばし人家あらねば、もち來しサンドイツチをたべて、北へと割合によき路をゆく。狭けれど馬も通ふらしい。このまゝ本道を北東へ導かれゆかば、烏川の源頭に出でよう。それを下れば烏淵村月並あたり。もし西して鼻曲山の頂近くを掠める林區署のお役人の巡視路に入らば、草こそ茂れ、澤はあれ、峠へ出よう。更に西して小瀬へむかふのも、かなたの炭

焼路へ出さへすれば楽なもの、たゞ出るまでに時間が入らう。東への巡視路なら角落山へゆかれよう。

むかしの姿を何一つ留めぬらしい古い古い火山の鞍部かんどに立つて、案内と相談してゐた私は、角落山のほとりまでゆかうと、本路を去つて草をわける。ヤマヨモギ高く、アヤマ咲き、イタドリふし、ギボシのびたる間、鶯聲を脚下にききつゝ進む。風物かはらず、今よひの事も氣になるので、劍が峯のほとり近くで引きかへす。

元霧積一時五十分 霧積川の青き、白き、時に深き流にわかれ、徒渉してつまつた足袋のあゆみよからず、草鞋かへて山幾重、登るに呼吸がはづむらしい。

その夜私は池間にのぼつた。

(五、七)

月夜の浅間

暖かい夜だ。月は雲のあなたながら、さすがに、ほの明るい。オホマツヨヒグサの花浮ぶ高原、離れ山を右に、私どもは馬で進んでいつた。後につゞく川澄君のは、さまでならねど、私の馬はたけ高い。蹄の音もまた。

沓掛くわがけに來れば、甲斐々々しい服装の一團は、誘うて下された日曜學校の人々。馬丁は私どもをこの宿から北へと導いていつた。湯川に添へる幾丁、それを離れて里餘。のちの道はやゝ登り。路のべの梢が、をり／＼に帽を拂ふ。晝ならねば、枝から枝へかけわたした蜘蛛の太い絲が顔にかゝる。谷を隔てた浅間は、夜を眠らぬらしい。雨に掘られた草津街道、いつか四百メートル餘も高みについで、もう小浅間の麓。馬をすてゝ、そこのあらい茶店に一休み。教文館の小

堀田君たちの威勢のいゝ顔があらはれ、ついで日曜学校のU君たちの一行も來られた。

夜はもう一時半すぎ、水を甌に詰め、二つの提灯にシラカンバの草の徑をわけて、今度は西へとたどる。側火山、小淺間に別れて、淺間の母體にすがらんとすれば、西風峰より吹きおろして、さきに晴れつ、くもりつした月は、具足圓滿の姿を、巨大なる山の左の肩に現はした。小淺間は雲烟の中に頭をあげる。あたりはいづこか分きがたき幻の郷、月の國。歩みは静か、息をついて見かへるごとに奇しき境、山か、里か、野か、川か、その半を雲と闇とにかへし、半を月の薄明りに盛りあげてゐる。ひろき綿の海の近きは、さながら雪田をみるおもひ。わが踏む安山岩の礫に生けるイタドリの白花が、黒いあたりに定かならぬ模様をおいてゐたのも、やゝに消えてゆく。

立つところ、次々に高うして、風ますく強く、月いよく清ら。こんなに

近い月を見た事はないと、同行の誰彼相語る。雨のおそれはあらずなりたれど、このむかひ風、煙をいづかたに避くるがよきか。避くる方なき風を避けて、私は路を案じてゐた。山は絶えず白煙を、ときに黒煙を吐く。

曙は近い。夜の間をてらす月もある。されど來るべき榮をまつのが悪からうか。私は榛名の方を幾度となく顧みた。時に身を、こゝも露おく山に横へたまゝ、たゞ黙して、きらめく星を仰いだ。月は——暮へども安んじ得で、來るべきをまつ私とも、一行と熔岩とを靜かに後から照してゐた。彼は、情を解せぬ人の子を憂しともおもはず、かゞやいてゐた。

とある窪地に荷を置いて、聊かの食をしたゝめ、シャツを重ねて、なほ進む。月はあかい。しかも東は紅を溶かしそめた。足下も定かに見える。既にして日は影ならで形、形ならで質をおもはせる如き生命の日は、おのれにまどはる雲を破つた。

雲を離れた日の右は、昨日たどつた鼻曲、碓氷の山々、右へ、右へと流れて妙義、秩父、さらに甲斐の山々、富士は、冠をその上においてたつ。山は濃藍に、薄藍に、そして空をかたつてをる。

硫黄の氣がする。眼にしみる。北へと風をさけつゝ、火口丘の裾をめぐるゆく。細かいく砂、あとへ戻されじご後れつゝも迫りついた火口の一角、灰白き岩のかけに疲れた身をよせる。出づる煙のつゞきて絶えせぬ事幾萬年ぞ。己を割きたるその内壁、己を流したるその押出し。母なる地は人の子よりも強いのか。

西風強ければ火口をまはらず、直ちにもと來し路をすべりゆく。遠山の居ならびたるを、一座一座と數へんともせず、心ある波頭よと思へるに、川澄君は、

もろくの天は神の榮光をあらはし、大空はその御手のわざをしめす。この日こそばを彼の日につたへ、この夜知識をかの夜におくる……………

と詩の十九篇を唱へゆく。舊き火口のほとりらしきあたり、後れてのぼる友とあひて、讃歌の隊は、いつか祈禱のつごひとなつた。いざとてまた上下にわかれてゆくに、みよ、濛々たる白煙の孕みつ、巻きつ、怒りつ、狂ひつ、のぼるを。煙なり、しづまらんと引き下りてあるに、煙中さらに煙を出し、高くく湧きあがり、つひに低く垂れて、私どもの歸路を塞ぐ。煙の路をさるをまちて、また降る。前の窪地に荷物をとりまとめ、心しづかに下りゆけば、イタドリ、コメガヤ、まづあらはれ、ガンカウラン、マンネンズギ、イハカガミついて眼に入り、胡瓜かじる小淺間の麓には、コメツツジがさいてゐた。

輕井澤でかつた一足の草鞋が切れもせず、そのまゝ、再び馬上の人となれば、朝の高原には、ヤナギの嫩葉うつくしく、淺間は日をうけて、あかく、すがすがしく。

——夜十時半輕井澤發、翌朝十時半歸着——

浅間の麓にて

遠近の里

軽井澤、杳掛、追分、このあたりを遠近とらちの里といふとは、伊勢物語の「しなのなる浅間がたけにたつけむり、をちこち人の見やはとがめぬ」に基いたにしても、あまりに歌枕めく。どうせ名は、他から呼ぶものにしても、こゝがさういはれたか、どうか疑はれる。それにしても、古への人のいふなる信濃坂、今の碓氷峠こえきた旅人が、山の息吹いぶきを仰ぎつゝ、この高原をたどるをり、人家遠近、鳥聲啼々、野末を山々のかざるを見ては、實ならぬ名も、真に近き境となるではなからうか。

人は里を厭ひて、里を戀ひ、水を欲して、水をおそれ、高きをのぞんで、山

を憚る。

軽井澤

軽井澤とよぶ地名は、諸國に少からぬ。鴨の居る澤の意であらうか、水涸れたる澤といふのであらうか、それとも一休みして、また山へ入るべく、乾飯かんいひつかふ澤であらうか。古人の日常の語は、後人の謎となつて、解き易すからぬ。

驛の東北端、峠にかゝらんとするあたりに、英國の宣教師シヨ一氏の碑が建つてゐる。「これを建つる者は村民なり」との句に、何やらを思ひ浮べる。シヨ一氏は新なる軽井澤を見いでた人、高原の赭い家々、斯ういふ色を染め出したのを村人が徳とするのであらう。衰へた驛、それが今は殆んど家並に横文字の招牌を出してゐる。日曜日には、クリスチアンならぬ家も、カーテンをひく。

私たちの宿は、峠が裾をひき残した地點にある。離れ山正面に、浅間山右に、愛宕山は更にその右に立つ。庭には火山礫が雨に洗ひ出されてゐる。そこにい

つもよく音づれるのはキセキレイ、みどりがかつた褐色の背、鮮やかな黄色の腹、庭上をひた／＼と跳ぶよと見れば、日おほひの杭にとまりて強く、ビビツと鳴く。ウグヒスも鳴きしきる。ホトトギスはをり／＼に。

碓氷川の源

峠町の北端、いさゝかおりた溪間に、水の湧き止まず、冷く清さが、碓氷川の源をなしてをる。ほとりの巨木は、水氣を浴びて、見あぐる梢まで、隠花植物の衣をあつく纏うてゐる。その寄生してゐる植物のおの／＼の葉が、数々の露の玉を宿してゐる。殊に今日は露が深い。

幾度か見なれた札をまた見る。この水汲みにゆく路をこしらへたお婆さんが、もう老衰してをる。志をおやりなされてはと書いて、下に小さい箱がさがつてゐる。かう書いてある横文字と、その人とは違はう。されどさうした人も世にはある。生命の路をひらきつゝ、人は老いてゆく。

遠くでフクロウがホツコ／＼と鳴く。

小 瀬

溪間になくホトトギスをめでて、水に掘られた路を登りつめると、かわいた高原、まばらなる赤松林、浅間山はさすがに堂々たる姿であつた。右手のは小浅間、左手のは牙山きばやま、一はおちつきを、一は鋭さを——いづれも主たる浅間のある面影をうつしたやうに、そして引き添うて離れぬやうに、また守るやうに。雲が浅間の肩を掠める。空は晴れて風あらず、白樺の葉もそよがぬ。路はやや下り氣味。しつとりとした茂みに入つて、幾株かのジンエフイチャクサウを摘む。根を熔岩におろし、葉を苔にしき、花穂を抜いて、物おもふらしき、つづまやかな花、その青く、白き、梅鉢花の小輪に、森の氣が通うてゐる。

谷に下つて曾遊の蓬萊館、新館とて川向うの新らしきに背囊おいて、湯壺に入るに、湯は清ら。ひどり後ろの山に登れば、いづれへ通するやらん、高原の

一路、紅紫のヤナギラン亂れ咲き、キツリフネひそみ、カラマツの實生らしきが、小さいながら太つてゐた。

歸路は輕便鐵道、その停車場のほとりには、ちどのコケモモが隠れ、幾株かのヤナギラン、ウスユキサウが咲いてゐた。春ならばレンゲツ、ジが見事であらう、今はその大きい葉と實とが。小さくとも、危末でも、斯る停車場は少なからう。驛員としては、一人の構内では、おかみさんが柴をくべ、獵犬らしい小犬が、人なつくくふざけて居た。

汽車は思ふにましたる眺望であつた。妙義の骨立せる、佐久平のひろき、景いくたびか改まりて、車は、アヤメ笑み、ウツギ靡く離れ山の裾を縫うてゆく。

(五、七)

輕井澤より

新約聖書改題のなり

きのふの日曜は霧雨でした。白樺の幾本かに守られたやうな西洋人の會堂では、ユニオンのコフィン博士の説教がありました。(私どもの宿からは川添君が總代格で参會しました。) どれもく横文字の看板を出してゐる輕井澤の商家は大方幕を張つて休んでゐました。たゞしこれを基督教の感化とみるのは、外矢そんやでせう。

松山翁とつれ立つて峠までゆきました。山も、溪も、霧が治めてゐました。夕から夜へかけての強い雨は、その霧が友を呼んで來たのでせう。

別室に休んでをられる翁が、別所さんといふ。心つけられたのは、ホトトギ

スの鳴く音でした。

ツバメが亂れ飛びます。コマドリが頻りになきます。鶴屋の別荘の難な普請、そのこの八疊に急拵へのテーブルを据ゑて、私たちは坐つてゐます。五六十冊の書物がそこ、にありまます。きのふ峠の見晴しから採つてきましたウスエキサウ、ヤマヲダマキ、トリアシシヨウマ、シモツケサウ、フヂバカマ、ウツギ、さては今朝川原でとつたオホマツヨヒグサ、キリンサウなど、紅黄白紫十餘種の花が投げ込みにはひつてゐます。あゝまた曇つて來ました。そこでヘブル書の七章、どこしへの霞のうちのメルキセデクの事を、今話してゐるのです。廣島の菱沼兄から英語の手紙が來ました。

「主よ、願くは凡ての人類を祝し給へ、我らを御許に導き、我らを守りて、御許に住ませ給へ」

かういふ祈を何人かの企で、全世界に傳へようといふのださうです。これを寫

して九日の中に九人の友だちの許におくるのださうです。午後まで會議をつゞけるといふやうな振合ですから、つゞくかどうか、危ぶまれますので、こゝにかいておきます。

—七月十日—

二

信濃坂といふ古名は、方々にあります、碓氷でないともいひます。そのこの峠は晴れつ、くもりつします。

日曜學校の講習會は、よほど盛會のやうに承つてをります。そのうちのある方々から、數回の御誘ひ、つひには川澄明敏兄の膝詰の御説得をうけまして、たうとう月の夜を淺間にのぼりました。意氣地いけぢのないからだの事ですから、あれもこれも同行諸氏の御厄介になりました。雲の海の上に盛りあげられた富士以下の山々は、莊麗な姿でした。火口丘の下、頂より百メートルも下つた一地點、さきほどから川澄君は詩の十九篇をそらで讀んでをられました。そこで

祈禱會が開かれました。神の造らせ給へるこの大なるものに包まれつゝ、神の造らせ給へる他の大いなるものの運命をおもふやうな祈禱がさゞげられました。最後に私どもは握手の禮をかはしました。

私ひとりには、淺間行のまへに、溪流をいくつかよぎつて、霧積へゆき、鼻曲、劍の峯、角落山のほとりの草をわけました。霧積は、以前のどこの浴場が流されて以來、峠からの路は可なり荒れてをりました。

川添兄は、野田屋へいつて頻りに本をかつてきます。ランダス氏もよく買ひにゆきます。もうかへりませう、あんまり買ふからと言ひながら、老先生は本を見てゐます。

キヤメル氏の遭難は、いかにもお氣の毒な次第でした。

私どもの會は、少しづつ進行してゆきます。デビンソン兄は、この週一度かへられるさうです。少しおくれて來られたラルネデ博士は、遮光器をかけて、ウ

エスコットのヘブル書の註解を見てゐます。をりく早言で、何かいつて、古雅な字を手帳にかきつけてゐます。

三

ミツシヨナリーの方々が、幾組か結婚なさるやうです。支那から來てをる人もあります、今さらいふまでもなく、ここは東洋の輕井澤です。

さきほど愛宕山にのぼりました。千百七十五メートル、今をる處から二百メートル近くはつたに過ぎませんが、可なりのながめでした。斷崖のもとに、大きな針葉樹がたつてゐました。その上のすべるやうな處へものぼりました。同行せられた青山出の淑女たちに恨まれたかも知れません。ヤマヲダマキが知らん顔してさいてゐました。

日が照れば、燈火がつけば、いろくの蟲が、室の内にはひつて來ます。アプなどにさゝれるのは閉口です。しかしまへ申しました通り、私どもは鳥聲に

かこまれてゐるのです。昆虫多ければこそ、之を餌にする鳥がゐるのです。セキレイは殊に多うございます

(七月二十日)

□

廿二日の土曜日は、休日でしたので、家庭夏期学校へいつて見ました。六時からの祈禱會には三十餘名の人たちが集つてゐました。婦人の方が司會してをられました。鳥聲が堂をめぐつて静かでした。八時からの講演には植村先生が相かはらず壇上で腕組をしながら、パウロの書翰にあらはれた信仰生活を説かれました。横濱の毛利牧師も使徒の事を談られました。聖書國の漁業と魚類といふ事を私も一時間ほど話しました。午後も植村先生、齋藤勇氏、石原謙氏の演説があつたさうでございます。

私は土曜の午後から發病し、その夜から苦しみました。お醫者さんを迎へましたり、氷枕をそなへるやら致しましたが、熱も頭痛も減じません。

日曜一日は、砂糖湯をのんだだけ、今日、月曜になつて、はじめて生玉子とスープをとりました。明日あたりからお粥がたべられませう。川添君が手ばやく氷をとりかへて下さいます。ホト、ギスが二聲、三聲なきます。

しのびよりて俄かに我をうちたふし、高く笑ひてゆくよ、病魔は。

四

二晝夜間もてあそばれし渦巻をわづかにのがれ、我を見るかな。

病の手をやつと脱れたつもりで、斯ういつてゐました。それを裏切る者にたちまち裏切られました。電報は發せられました。家の者は來ました。スワルツ先生はあらしの日にも、朝と夕二回づつ、手當をなすつて下さいました。田中儀三郎兄以下皆様が介抱して下さいました。

身のうちの百千のながれ逆行し、五十餘時間、膽汁を吐く。

氷囊は三まで破れて、冷しおく頭の痛み去らんとせす。

夜は更けぬ、氷を砕くわが妻のおどのはかには物音もなく。

どいつたやうな境が續きました。寝がへりをしてもすぐ吐きました。ちひさい體の内に起つた革命を、私はどうする事も出来ませんでした。

一週間ののち、「客僧を上坐に泣かす蚊やりかな」でも言ひさうな委員席に、再び私はつきました。足などやゝ瘦せました。此の間うちは堅かつたマツムシサウがもう大きく咲いてゐました。鳥の聲はやゝ少くなりました。

丘の上の趣きのあるデビンソンの新居で、デビンソンの老博士や、ミス、ラツセルにあひました。そこは愛宕も、離れ山も、淺間も、雲場が原も、眼に入る山腹でした。ミス、スプロールスは中旬までゐて御殿場へゆくとか言つてをられました。佐藤おさくさんが、そここゝ案内して下さいました。

今はペテロ後書を議してゐます。十二日ごろには、こゝを引きあげるつもりです。「輕井澤より」も、おしまひになりませう。

(五、七、八)

碓氷のある地にて

霧しげき峠をたどる、赤くくえた山の岨道、人がつくろへばとて、水は山をば刻むであらう、わが踏むこの土もいつまでかこゝに残つてゐようぞ、移るものは、人のみかは、涸れたる谷のほとり腕をひろげて喬木が雨に煙つてゐる。カンコドリが人を誘ふ、ホトトギスもなく。(五、七)

中房川から梓川へ

中房へ

七月二十日の朝三時半、松本驛におり、驛前の旅籠屋についても、信濃鐵道の一番までに、朝の食事は出来ぬといはれて、支線側の待合へとつてかへす。電燈一つの暗い／＼ブラットフォームの腰掛に、地方の人が二三人、駢をかいて眠つてゐる。夜はやゝ明けんとして小雨がそぼふる。よくない物を賣つたとか、呼賣禁止とあつて、構内では辨當も、新聞も買へず、五時廿分、小い汽車に身をよせる。前山に雲迷うて、志す山々は見えぬ。梓川も濁つてゐる。六時半ごろ有明驛につく。中房温泉案内所にて、車をたのみ、人夫をたのみ。七時九つ。犬が車の綱をひく。中房川よぎるをりなど、犬は川中におりたち

て、身を冷し、水をのむ。溪流にそひて進む。八時半、有明神社。九時半、一の瀬の茶屋。こゝで車をかへし、水をもつてをるやうな空なので、雨衣をつけ、郵便屋さんに導かれて、中房へと辿りゆく。溪はやゝ狭くなつた。山せまり、木おほひ、岩あらはれ、水激す。玉垂の瀧、彌助の瀧、朴の木澤、土方おとしなど、郵便屋さんが教へてくれる。そこにて變死したる人あれば、その名をもつて地を呼ぶ事、なべてのならばしである。溪を右にして、雨の路をゆく。たまに左から落つる流に、足を洗はるゝも快ちよい。いつか日がさしてくる。人夫もおひつく。信濃坂、十一時。山幽にしてキツリフネが叢りさく。小舎に休めば汗にうるほへるシャツが、肌につめたい。さらに登りゆくと、夕立がさつと降つてきて、一度脱いた雨衣をきるまに、ぬれてしまふ。すでにして湯の香、左手に一つ家あらはれ、次いで中房の温泉宿、もう一時になつてゐた。

草鞋ぬいて湯槽に入ると、湯があふれる。主人夫妻の世話になり、明日の人

夫の事など頼みて、十時眠につく。

燕、大天井、槍澤

廿一日、一昨夜、眠をなさなかつたせい、今朝は四時半まで眠つた。あわてゝ起き上ると、空は晴れてゐる。六時、燕岳へとむかふ。くえたる所一ヶ所の外は、小徑さまで悪しくない。たゞ連日の雨に道がじめくしてゐる。ブナ、シラカバ、モミ、タウヒ、ナ、カマドと、青の溶けこむ深山木のもとに、マヒヅルサウや、ゴゼンタチバナが白く、イハカマミヤ、シヤウジャウバカマが赤い。ウグヒスがなき、ヒガラが歌ふ。打ちひらいた所から彼方を見れば、大天井、東天井、常念と、ひだに雪を藏めた峻嶺がそびえてゐる。堂々たる山の姿、連嶺は瑠璃色なして、頭をうすものほどの雲に拂はせてゐた。

八時四十分、二四八九メートルの燕の三角點。燕の頂き仰がれ、餓鬼嶽の頭も見える。ナ、カマドはシヤクナゲと共に、ハヒマツの間にさき、ミヤマキン

パウゲはキンバイサウとともに黄に、コケモ、小く、シラタマノキ丸く、アヲノツガザクラ青白く、バイケイサウは葉をうち開いてゐる。一緒に宿を出た一高の人たちは、さきへいつてしまふ。初めて雪に跡を印しながら、九時廿五分、燕の小舎について戸をおしあける。霧が濛々と立ち塞がつて、さしわたし十町とあるまじき燕の頂きは、もう見えなくなつた。

お茶を出してもらつて、霧の晴るゝをまてど、容易に晴れやらぬ。あきらめて九時五十分、小舎をあとに、ひとたび、あの屏風なす尾根に身をさらすや、天風飄々と信飛連嶺のかなたより吹き來つて、雨氣を帯びてか、肌寒い。風を岩かげに避け、雨衣をまどひ、草鞋を新にし、ひた急ぎに南へと、岩の尾根をたどる。道、尾根の少しく東をゆく時は、風をおぼえない。時に雪の上をこえたりする。多からねど山の花もさく。ヤマザクラの大ならぬが、灌木のやうに、うなだれて咲いてゐる。ハクサンイチゲは白い。十時廿分、突兀たる蛙岩。さ

きほどよりは空が穩かになつた。かへりみれば燕岳も霧の重圍を脱した。硫黄、槍、さては五郎などの山々も、頭を雲に包ませながら、いかめしい山肌を雪を抱いてゐる。十一時、リヤウブの生ふる地を過ぎ、十一時四十分、切通しの難所をすべりおりて、風のあたらしぬ地で食事をする。十二時半、巉岩の大天井。霧がまたかゝつてきた。雨が衣をうつ。まるきイハウメの花さけるあたり、東鎌尾根をゆかんかと思へど、案内は夜に入りては道も難儀なり、途中の露營もこの分にては、焚火容易につくまじなごいふに、易きについて道を二の俣小屋の方へとどる。

一時四十分、二の俣の小屋につく。小屋は二軒ありて、今は人もをらぬ。廣場のあなたこなたには、前に山の旅をした人たちが、露營のをり、石を積んで疊みなしたかまごのあとがある。山の小屋場すら變りゆくのを思ひながら、少し休んだ。日が照つて、空も穩かになつた。常念坊への別れ路で、いづれの途

をどらんかと迷うたが、この分なら四時に常念坊につけよう、やゝ早過ぎると自分もおもひ、毛布だけの常念坊へつくよりもと案内も勸むるので、少し骨がをれるが、なほ五時間行程の槍澤の小屋までゆかうときめる。東天井のいたゞき、尾根を東にとらで、南へとゆく。常念嶽が松本平でみるのとは違つた姿で仰がれる。常念の小屋もみえる。やゝ安らかな心持で、しばし石のからくしした尾根を通つてゆく。赤岩嶽が右手にぎざぐざを見せてをる。いつか私どもは二の俣の澤へと吸ひこまれる。エンレイサウが笑ふ。この間からの長雨で、二の俣の澤は、水が道を走つてゐる。その水の中をざぶ／＼と私は進む。徒渉も數重なるどありがたからぬ。丸木橋もわたつた。草鞋もかへた。水あれ、石いで、道のやゝ分りにくい地點もあつた。四時三十分、二の俣の池の跡。川が再びあれたので、池は石に埋つて、枯木が林立してゐる。五時半、槍のドウにおりる。碧の潭にのぞみながら、案内は食事をする、私はパンを少したべる。

雨がまた降つてきた。赤澤山の赤い岩根を雨にぬれそぼちながら進めば、穂高の一部が見える。大分疲れたころ、燈火うすじろき槍澤の小屋が現れた。草鞋をどけば正に七時。常念からかど問ふに、中房からと答へると、主人は大層早いと、お世辭をいふ。五右衛門風呂ながら、山での風呂はありがたい。その食事もうまかつた。昨夜常念にとまり、今日槍に登つたといふ先客の一人は、雪溪で滑つたさて、腕に手當をしてをられた。夜九時、床につく。相客も少く、夜は静かであるのに、私は例のまんじりともしなかつた。足の指がいたむ。深夜、戸外に出づれば、溪間の夜半に、星の光が淡い。

槍澤から上高地へ

二十二日、怪しい空模様なのに、つひ支度がおそくなる。雲は槍の方から湧きあがる。六時過ぎに小屋を出たが、雨にあつてひとたび歸る。七時またたつ。雪溪を越えたり、少しの徒渉をしたりする。東鎌尾根のざざぐぐが上に懸つて

ゐる。七時四十五分、雪溪でまた雨にあふ。上からおりてくる人たちと語る。昨日、中房をともにたつた一高の人たちは、東鎌尾根を経て、六時に殺生小屋についたといひ、燕であつた二人の軍人は、四時に殺生についたといふ。四時とは驚かれる。尤も東鎌尾根にかゝつた人たちも雨にはあうた、そして今朝は霧で何も見えなかつたといふ人が多い。大槍の小屋の一部の吹き飛ばされた材木が、雪溪の上におちてゐる。若い人は着御座きござなど利用して、威勢よくおりてくる。それでも大きいクレールバスが雪の口を開いてゐるあたりへ來ると、こはさうな様子をして、落ちたら上れませうかなどいふ。雪溪のほとりにはミヤマキンバイであらうか、青みがゝれる黄色の球形なせる花が、數かざりなく咲いてゐる。雪間より芽ぐむ草は、紫色なしてゐる。

九時、大槍小屋のほとりまでいつたけれど、昨日、二の俣澤の徒渉に、草鞋がけがつまつて、足の爪を浮かせたのに加へて、昨夜、一睡もしないので、足

が抄取らぬ。それに雲深く、登ればとて、あたりの見ゆる空でない。つひに空しく槍澤の小屋に引きかへし、食事をなし、草鞋がけをかへて、十一時五十分、上高地へと向ふ。梓川の水に送られて十二時五十分、槍澤のドウにつく。案内者が私の替草鞋を忘れて、持つて来なかつたのに困つたけれど、草鞋がけをかへてから足の痛みは大分薄らいた。川添道の細きをゆくに、雨にくえた所二ヶ所ほどあり、根曲り竹にすがつて越す。雨に濡れた丸木橋は、すべりさうで、下には碧い流が白泡をたてゝをる。

三時すぎ、道の難儀な所をのがれ出で、廣場に入る。雨、沛然として来る。牧とて牛の子の人をさけかねて、狭き道にうろくするもかはゆい。雨の中ながら、梓川の流は美しく、雲迷ふ穂高の姿も尊い。妙なかをりがをりく鼻をうつ。焼嶽の噴煙のせいであらう。トクサヰハのほとりで休んでをる若人にあふ。荷をおろす所があるので、案内を休ませると、若人もそばに来て、上高地

へどれほどあるかと問ふ。案内がまだ一里からあると答へると、がつかりした様子で、宿は定まらねど、四人とかの連は上高地へ下つた、ラムネと饅頭をもつて迎へにきてくれと頼まれる。その人の名と連の名とをきいて、こゝまでくれば何でもありません、ぼつ／＼お出でなさいと、もう平になつた道をゆく。山林官吏の居るときく新しい家を見て、依頼せられたるに近い飲料でもないかと、戸をあけようとしたが、錠がかつてゐる。しかたがないから、橋をわたつて前よりはやく急ぐ。それでも濡れたからだを上高地の五千尺旅館によせた時には、はや六時をすこし過ぎてゐた。氣分のわるい人の連の事をきいても、こゝにはゐないといふ。それでやく離れてゐる清水屋へ使を出してもらふ。その夜の食は口になうた。

湖のあこを

廿三日 昨夜は雨であつたが、けふはまづ降らぬ。穂高も半は見える。槍へ

ゆく隣室のお客さんは、ゆくか、どまるか、ためらうてゐたが、たうとう出てゆかれた。私は用心に雨衣をつけたまゝ、八時半ごろ池を見にゆく。風があつたので、草の露はしげくなかつた。クルマユリや、ヤマヲダマキや、フウロサウのさく昔の湖のあとをゆくと、オニクのせいの高いやうなのが突つ立つてゐる。イチキなど喬木の枝をはるもとを過ぎて、九時ごろ田代の池につく。人工かと思はれるばかりの可憐の池、木をのせた中島も小い。イハナがすいと水を切つて、藻の中にかくれる。雲をいたゞいた焼岳のそこゝから煙を吐いてゐる。こなたに霞澤嶽の岩山が儼然としてゐる。シラカバの休み臺に腰をかけて、おちついた水をながめる。焼岳はまだ現れざりし日より流れをりしといふ梓川の水よ、そなたと焼岳の噴出と相まつて、こゝ山間の盆地に大いなる湖をなしたそのかみは、如何ばかりなりしぞ。湖は成りつ、移りつ、あとを止める。しばしゝて大正池へと道を求める。梓川の面にむかつて、兩岸より二本の立

木の幹をも、枝をも出せるをそのまゝ橋杭にかへ、欄干にかへたる橋をわたつて、じめじめした地を通り、また河原を通る。ゆきついた大正池は、焼岳のおし出しに水をせいてなれるもの、面積もひろく、地もあれ、立樹も枯れて、田代の池のやさしきよりは遙かに心をひく。水多くして池のほとりの進めぬまゝ、また林間の道をゆくと、「右、焼岳、蒲田みち、左、平湯、白骨みち」この立札がある。その左の平湯みちをとり、さらに柚のはひつたあとの小徑に入り、きりたふされたシラカバや、ネマガリ竹を踏みしだいてゆく。針葉樹の一本、池畔に突出してゐるあたり、池はまた別様の趣きをみせてゐた。

歸路につけば、山の神の祠には、稻核や、鳥々の人々の奉納した小い幟が立つてゐた。イハナ釣の家に、主人は見えず、釣竿が何本も家によせかけてあつた。温泉のわきを通つて、河童橋わたる。もう正午になつてゐた。宮川の池へは水まして徒涉かたしといふを聞きながら、宿にかへれば、草鞋の紐とかぬう

ちから、さつと音して、夕立が来た。洗濯物とりこむとて、宿の女中たちは一散にかけて出る。

徳本峠こえて

廿四日 昨夜、宵のうちは薄い月が空にかゝつてゐたのに、夜半からはひどい暴風雨。前の夜もふつたのだから、朝になればやむかと思つてゐたが大違ひ。五色が原で一晝夜あれられた時もこんなでしたから、廿四時間つゞきませうと、昨夜から室を同じうした白金しろかねの成瀬さんはいふ。穂高はすつかり隠れて、梓川の清流はもう濁流滔々、風にシラカバや、ヤナギは總身を振はせて叫び、河童橋はあふられて、一上一下する。それでも朝は出かけられないといつてゐた人夫の、雨のをやみに、鳥々へ下るもある。小ぶりになつたかと思ふと、また強く降つてくる。梓川の川原にテントを張つてゐた學生たちは、宿へにげて来た。晝ごろになつて風だけは凩いた。昨夜お近附になつた第四高等學校の林教授

にすゝめられて、一時ごろ人夫をつれて、鳥々へと向ふ。成瀬さんは雨がつかつたら、徳本の小屋あたりに泊めてお貰ひなさいといふ。雨の小やみに宿をたつたが、いくほどもなくまた降られる。上高地の平な道も、泥濘となつて歩きにくい。峠にかゝると、水はけがよいので、道はわるくない。ぬれにぬれて徳本峠、三時。穂高が雨中にぼうつとしてゐる。池見橋もこえた。いくめぐりして峠の小屋。おりくちになると、胸ぐるしいのがをさまる。雨もやゝ小降になつた。のぼりくる中學生たちにも、何人かあつた。このさきに物賣る所はないかと聞かれてない、よい水はあると答へると、「おやく弱つちやつたな」といひながら、いたづらでもしさうな眼の色は、一向弱つてゐない。

コナシやトチの木トチノキの生ふる美しい溪流にそひての下り、雨もやんで、足もおのづから軽くなる。丸木橋あり、柚小舎あり、柚は簑笠つけたまゝ、押出しのあたりで、木を伐つてゐる。岩あり、その下に人を宿すべく、喬木あり、河中

に生じてゐる。ウグヒスがしきりに鳴く。五時、岩魚止、六時、行の橋。島々谷はほんにうるはしい。水ももう濁流ではない。こちらはそんなに降らなかつたのかも知れぬ。ぬれた衣も、次第に乾く。トロツコの枕木の上をすた／＼とゆく。たゞ其の枕木がいつまでも續く。枕木はつゞかぬでもよい、梓川の急潭ははなれたくない。水は時に深く河底をえぐり、時に岸への岩根を動かしてゆく。

島々にかゝるころには、もう夕ぐれ、雑食橋もとのさまならず、西洋づくりの発電所が明るい。島々驛とは島々ならぬ大野田であらう。そこについたら八時近くなつてゐた。そこから電車で松本へ。松本で林氏に別れ、案内者をねぎらひて、自分は自分でおくれた夜十時の列車に。(大正十二年)

日光の秋

月の夜を都の西郊へと迎つた自分たち、日の出を埼玉の平野へはひつての列車から眺めた自分たちは、いつか秋晴の多氣山の岩の赤く、こゝしいのに見入つてゐた。既にして日光の山々も現れた。高原、林、下草、そのいづれにも、秋は歌うてゐた。

荷物は馬返しの茶屋に預けて、まづ丹青山と笑をかはす。幸橋、榮橋、大谷川の水の白泡たて、流れゆくに、若き人たちは歡聲をあげる。深澤の溪はいつ見てもよい。まして今日は丹青山が文字通りに紅なしてゐる。その露出する岩は、物皆湧き上りし日を語つてゐる。

方等、般若、知られた場所ながら、此の日は殊に優れてゐた。やゝ大きい方

等、やゝ小い般若、二つの瀑を集めた此の溪間を、紅と黄とが埋めてゐた。あの深い處には、さういふ事をした誰かが匿れてでもゐるかのやうに。

誰彼をさしまねいて、左へと見晴しの高地に登る。地をはふ小い樹々まで紅葉してゐる。頂きの茶屋は倒れて、屋根がのめつてゐた。されど視よ、男體を、視よ、中禪寺湖を。彼は力か、此は美か。強きも、ゆたけきも、ある世と見え

る。
紅葉の中を大平^{おほだいら}へおりて、あのブナとシラカンバ^{しらかんば}との林をゆく。湖の落ち口
すぎて、先立ちし友におひつかんと、急いで中禪寺へ。

友は大尻橋の彼方にゐた。石に踞し、水にのぞみ、小魚とかたる。

雲は男體の肩のあたりを掠めて舞ひあがる。白根も彼方に坐をしめてをる。

湖は廣い。古への僧勝道は、果してどの道を経て、こゝへ來たのであらう。志津あたりを越えて、男體からか。今は、たをやめのやうな此の湖も、その時

つと凄かつたであらう。友は風に倒されたナ、カマドのノバラなす果を貪るやうにとつてゐた。

歸路、華嚴の瀧をみおろす地點に立てば、さすがにいつもながらの眺、水はたぎりたぎつて落ちる。主瀑の外の白簾も美しい。岩の相もそれと異なつてをる。

さるにても此處の溪の紅葉の美しさ。曾遊のある朝は、太平の一地、紅葉の中をゆくと思つた事があつたが、けふのはそれと違ふ。ある距離をもて、足下の溪と、彼岸の山との燃ゆるのをみるのである。

大平の林のおだやかな中を、日が過ぎようとしてゐる。黄昏が山の道ゆく子らを、やゝに包まうとする。

(七、十)

秋の那須

十月十二日の朝七時の列車で、青山學院の人たちと上野をたつ。赤羽をすぎて荒川の鐵橋にかゝれば、曇り日ながら薄く不二が浮んでゐる。岡田さんは武甲も見えるといふ。古河で筑波根のかすかに書かれあるを、あれよと指すまもなく、兩毛の山々が雲間にかゝる。もし正面のが赤城であつたら、その右のは袈裟丸けさまるかもしれぬ。宇都宮で男體山をかいま見、野崎につけばもう那須、高原火山群があらはれ、ついで黒尾谷くろおをたに、南月なんげつ、さらに茶臼ちやうすの煙が立ちのぼる。十一時黒磯著。そこで一同おりて、私どもは自動車の客となる。那珂川の橋をわたり、那須の連山を仰ぎつゝ、晝ごろ那須の湯本につく。

松川屋に一休みして温泉神社にゆく。柚が大ナラをきつてゐた。社務所では

寶物を見るやうにしてある、甲冑やら、矢やら、鹿の角やら。鹿を狩りて湯を得た、動物によつて、出で湯を發見したといふ傳への中に、こゝの湯もはひとつをる。それを神の助とみるのも、古人の尊いおもひである。

社の横を右に折れて殺生石、まへに來た時より、廣く、嚴重なかこひが出來てゐた。子供のをりに讀んだ白面金毛九尾の狐の物語は、繪のさまざまで忘れねど、源翁和尚をこゝに見るべきにもあらず。明礬とる設けわびしく、湯の花とるおちいさんの髯は白かつた。此の澤は水滌々として流れ、ヤマウルシなど紅葉が、右岸をいろどつてゐた。そして山の峽に南月山が顔を出してゐた。さらに下ると茶臼が仰がれた。「石に精あり、水に音あり、風は大虚にわたる」謠曲のとは、ちがつた意味でなら、これをかりて、そこを寫してもよからう。岡田さんはそれをレンズに収める。

安政五年のあれに、こゝにあつた家々が出水で潰れた。人も死んだ。それを

記念する碑も立つてゐた。こゝがたちゆかなくなつたので、今の湯本に移つたのだとか。湯本に對して、こゝを元湯といつてをる。湯本に移るには領主たりし大關侯の保護をうけたので、地割もその時、間口五間づゝと定められたとか。轉じて東山公園への道をたどる。那須にはゐると思はなかつたニハトリが遊んでゐる。あとできけば五六年この方、那須でもトリを飼ふやうになつたといふ。ニハトリを飼はぬ習慣は、方々に残つてをる。之を忌むのは、火事に縁があるらしい。東京でも西の市の三度ある年は、火事が多いといふ。ニハトリが火を呼ぶとでもいふのであらう。澤をこえて東の臺地にのぼれば、裾野は秋の日を浴びて、脚下にひろがつてゐた。正面に高きは、八溝山かづさんか。うしろなる南月山、黒尾谷山につゞくは、佐飛山あたりか、さすればあれが高原山かなどとかたらふ。足下には、センブリ、リンダウ、マツムシサウ、アキノキリンサウなどがさいてゐる。ツ、ジはもとより多かつた。

町をよこぎつて湖月園へ、こゝも毘沙門、茶臼、南月、黒尾谷と、山々が背後を守つてゐる。池があつて鯉などが遊んでをる。こゝの方が草の花は多い。前にあげたのゝ外に、ウメバチサウ、ヤマハ、コなどが茂みに笑つてゐた。十二日、朝六時半すぎ、細雨の中を岡田さんと二人、元湯の案内の家にゆく。山へゆくとして、そこを立つところは、六時四十五分になつてゐた。案内は今日は降る覺悟と、あついものを著てゆく。殺生石の澤を出たのが七時十分、お段林おだんばやしの茶店についたのが同二十分。お段とは臺地の意味であらう。雨もやゝ収まつた。見かへれば、右端に筑波、正面に八溝山が、空際をかぎつてをる。銀線ひくは那珂川、そして雲の海がひくゝ下界を遮つてをる。

辨天過ぎて、大丸八時五分、そして八時十五分には、はや立木のかれたるをのぞむ地に來た。無数の木が骨のみとなつて、山腹にさびしげに立ち、サ、が樹下に生えてゐる。以前よりも枯木がましたかと感せられた。茶臼から噴き出